
疫病神と魔王

人性補欠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疫病神と魔王

【Nコード】

N3931V

【作者名】

人性補欠

【あらすじ】

リリカルな魔法世界にやたらハードボイルドな黒猫がやってきた。かつて疫病神と呼ばれたサイボーグと傷だらけの人間達が出会うとき、誇りと未来と絆をかけた戦いが始まる。

プロローグ（前書き）

リリカルを知らないです。これから知ろつにも金がないのでレンタルできません。でも、聴いて？

僕、頑張るから！

プロローグ

「目標沈黙。」

くそつたれ

「はあ、やつと仕事が終わる。まったく、今日はデートだったのに・
・ツイてないぜ。」

くそつたれ

「そう言うな。これで終わりだ。しかし、妙な命令だったな。」
殺してやる。

「まったくだ、こんな奴を処分してなんになるんだか。きつたねえ
な野良じゃないか？」決まりだ、お前からだ

「しょうがない、上からの命令だ。・・・悪く思うな。」

思うにきまつてんだろ、ちくしょうが。

「よし。」

動け

「完全に破壊しろよ。」

動け

「まかせろ」

動けよ

「な、なんだ。」

こんな時こそ根性だろうが「こいつ!!まだ」

よお、捕まえたぜ

ある所での会話

「ほえー、妙な事件があつたもんやなあ。」

机と一言で言えばそれなりの種類があるがここでは「デスク」という事務的な机の前に座つた少女が気の抜けたような口調で気の抜けた方言を使った。

「まったく、はやてちゃん？そんな他人事じゃないんですよ！これからバカみたいに忙しくなるんですから……。」「少女というより小女と言うべきなのか、妖精と言うべきなのか……。そんなちっさな女の子が先程の気の抜けた言葉を発した茶髪の少女を嗜める。」

「わかつとるよ、わかつとるからこそその言葉やん。」
自分に対する気休めなのだと言口では笑うが、目は笑っていない。

「ていうか、泣いてますね……。」「小さな少女が少しだけ哀れみをこめた瞳で先程はやてと呼んだ少女を見る。」

「うう、もうアカン。私、旅に出るう。全てを捨ててでも。どうや、リン？あんたもくるか？」と小さな少女に呼び掛ける。リンと呼ばれた少女は肩をすくませて。「なんとも、魅力的なお誘いですが、そんなことをしたら特別部隊が組織されて地の果てまで追い掛けられて追い詰められてしまうと思うので……。、そうなたら死よりもつらい恥ずかしさだと思つるのでお断りします。」とリンは無慈悲にしかしバファリン程の優しさを込めて答えた。つまり、口だけということだ。

「まったく、はやてちゃん？忙しいのは分かりますけど、今は6課は大事な時期なんですから。ここは踏ん張りどころですよ！」とギョツと小さな握り拳を胸の前で作つた。

そんな様子にはやては穏やかな顔で笑い、次の瞬間にはまったく別の顔ができていた。

(そうや。)

目に力をいれ

(やつと夢が形になるごとしとる。
背筋を伸ばして)

(私は負けんのや。
前をみた)

「 よっしや、始めよつか? 」

プロローグ（後書き）

やるしかない、さいは投げられたのだから、でもサジをなげないで！
そうしたらペンはなげないです。

引っ掻き傷（前書き）

いやあれなんすよ、本当に知らないんですね。お稲荷さんのなあれしか知らないんですよ。サイボーグクロちゃんに対するものはあります。あと単位をください。

引つ掻き傷

突然で申し訳ないが、わたくしスバル・ナカジマはインフルエンザにかかっていた。突然で驚いたのは私も同じだ。なにせ、これといった風邪なんかかかったこともなく、骨折まではケガじゃないと少し前まで本気で思っていたために病院にも全く縁がなかった。ゆえに、親しい友人達も「えっ、この子に風邪をひいたって感じる神経あるんだ。」みたいな視線を送ってきた。考えすぎではない、あれはバカを見る目であった。バカはバカなりにその辺のそこには敏感なのだ。とまあ、こんなこともあり私はめでたく、初の入院とあいなった。しかし、それでも私には「たかだか、インフルエンザごときで。」という考えがあった。大切な家族には心配するな、そして来ないでいいという旨を伝えた。2人とも心配してなんやかんやで来てしまうだろうから。しかし、まあ、ざっとこんなものだ。私にかかればインフルエンザなど3日でちよちよいのちよいだ。インフルエンザが私にかかったのではない、私がインフルエンザにかかったのだ、ワツハハハ！・・・ヤバイ、私には落語の才能があるに違いない。どうしよう、私どうしよう。楽太郎さんの弟子だったら考えたい。いや、むしろ山田くんポジションがいい。ていうかこのインフルエンザネタどっかで聴いたことがある気がする。どうすんの作者。

フオローは無理よ、なんて考える街の中。私は自らの職場に向かつて歩いていった。正直3日も休んでしまったのは痛い。あの人達は気にしないようにと言ってくれたが、訓練だつて休んでしまった。友人達は皆優秀なのだ。少し気を抜いたら置いていかれてしまう。皆のことは大好きだから、負けたくない。「よおっし！走るぞおっし！」なんて威勢のいい声もでてしまうのも仕方がない。

さあ、この晴天の下

私は華麗に一步を踏み・・・

「ギヤアアアアアっ!!」

なんか、踏んだ。間違いなく生きてるなんかを

恐る恐る足元を見る

ギロリと睨むようにこちらを見る黒猫がそこにいた。「引つ掻き傷」
「？」

いぶかしるようにはやてが金髪の女性に訊ねる。

「はい、2人の被害者の体にこうガーツと。」と女性は三本指で実演してみせる。

「まるで、猫さんですね。」とリインが呟き、猫ねえ・・・とはやても繰り返す。

「まさか・・・、2人は猫につ！？」と金髪の女性がハツとしたような顔をするも、「あかんなシャマル、40点や。」
はうつと、シャマルと呼ばれた女性は息詰まる。

「なんの点数です？それ。」リインは呆れ顔ではやてに問い掛ける。

「いやな、私関西弁つかうくせに、いまいちそのへんの関西弁キラとしてのストイックさに欠けてんねん。」

もつと食らい付きたい、私は、と遠いところを見ながら答える。

「それが、シャマルちゃんの採点にどうして繋がるんですか！」

もう、リインは何を聴いても納得するつもりはさらさらなかった。

「だから！もつと、はつきり振りを大きくせいと！！やりやあええやん！どうせ誰が見取るとも限らんし！？先に原作見てへん言うてるから、キャラとか好きにやればええやん！なんやねん、やんのかこらア！」

はやては泣いていた、誰のための涙かは分からない。

「ちよつ、待つてください！？首！首しめない・・・で。」「キヤ

ーっ！？ちよつと、はやてちゃん！！だ、誰かこの人止めてー！」

「うーん、だからゴメンってばー！」

街の真ん中で少女は謝罪する。先程、調子に乗って足元確認をしなかった結果として被害者である猫に通せんぼをくらっているのだ。

「だから、謝ってるじゃん！」

一歩でも前に進もうとするたびに黒猫はこちらを睨み付け、例の「ふーっ！！」をやりながら、牙を剥き、爪を剥き出しにする。これが、中々の迫力でスバルは猫を相手に二の足を踏んでる自分が情けないと思うようなことはなかった。無理して先に進んで怪我をするのはゴメンだ。

以前、仲間の1人である少年からこんなトリビアを聞いた。「大人の猫が本気になったら人間の成人は負けるらしいよ？」

あの時は「へー。」と返していたが今なら分かる。（あの時エリオくんの言うことをしっかりと聞いていればっ・・・。）しっかりと聞いていたら、この状況はどうなっていたのかは不明だ。

そもそもは、自らの不注意なのだから。故に彼女は思い悩む。

（えーと、えーと、どうする！どうすればっ！）

ハッ！とスバルは顔を上げた。

「えーと、お猫様！先程はとんだご無礼をいたしました！是非とも謝罪をしたいので私に着いて来てくださいますせんか！？」

ヤケクソだった。ふと気付けば、なんとも恥ずかしいことをした。

猫に頭を下げ、大声で謝罪をするなんて・・・、しかもこんな街中で。

(うう、ギン姉が知ったらなんて言うか・・・)

涙目になりながらも、一応黒猫を見る。

「え？」

目をゴシゴシと拭ってもう一度よく見てみる。

すると、あれ程怒っていた猫の様子が様変わりしている。にゃおーんとまで、まさに猫なで声を上げている。まるで、「早く行こうよ、お姉さん。」と言っているようだ。

「あ、うん、じゃ行こう！！おいしいご馳走が待ってるよ！！」

そう言って歩きだせば黒猫も歩きだした。

それはもう、どこから見てもただの猫。

気のせいだろうか？

一瞬だけ、ニタリと笑っていたように見えたのは。

(気のせいだよな？ただの猫が笑うわけないし。)

バカでよかったぜ。

引つ掻き傷（後書き）

改行とかも難しいですねこれ。なんとか読みやすいようにしたいです。あと、頑張って疫病神と魔王を会わせなければ。なんとか体を払えば単位はもらえるでしょうか。

猫は猫（前書き）

キャラが増えれば増えるほど、私の視線はブレていく。やっとヤツがしゃべります。

猫は猫

「・・・で、連れてきたの？」

うん。と少しうなだれながら答えるスバルにティアナはため息をつく。

訓練開始ギリギリで訓練場に飛び込んで来たスバルとその隣にいる黒猫をジロリと見つめ二度目のため息。

「退院したと思ったら、あんたは・・・。どうすればこんなところで猫を連れてくる流れになるの？」

だって、と顔をそらすスバル。話すと長くなるわけではないが、かといって単純な問題ではないのだ。さらに言えば（猫に脅された、なんて言えるわけがない！）というプライドがあり、それがさらにスバルを口籠もらせる。

「そ、そんなに悩むならもう良いわよ！」

ここまで弱ってしまうスバルも珍しく、少しだけ焦ってしまったのでこの件に関してはもう諦めることにした。したのだが・・・

「猫さん、少し新鮮です・・・。」と少女が猫をジーッと見つめる。

「新鮮？どういうこと、キャラ？」今度は隣にいる少年が訊ねる。キャラと呼ばれた少女は少し照れながら「うーん、上手く言えないんだけど、全然見たことないわけじゃないんだけど、最近見かけなくなってきたモノを見かけてなんとなく嬉しくなる気持ち？」わかるかなエリオくん。とキャラは少年に恐る恐る訊ねる。

「ズクダンズンブンゲンゲームみたいなものかな？」と少年はニコニコしながらキャロに同意を求めた。

（まったく、どんな会話よ。それよりも。）

そうそうそれそれと納得しあう2人をさせておき、ティアナはこの少し緩んだ空気の原因を見つめる。

黒猫、しかも、「ただの」である。

自分のよく知るただものじゃない犬とは全く違うモノだということ
は分かる。分かるのだが

（落ち着かないわね。）

ただの猫がこんなにも行儀よく人の隣に座っているものなのだろうか？

こんなにも辺りを見回しながら状況を確認するだろうか？

「ふう、スバルあんたこの猫どうするの？」

一応聴いておく。なんのつもりで連れてきたのだろうか？

「あ、そうだったご飯をあげる約束をしたんだっ！」

「約束？猫と？」

「うん。」

少し黙っていた間になんらかの覚悟を決めたらしいスバルはティアナを真っすぐに見つめて頷いた。

「スバル。」

「なに、ティアナ?」

「あんたまだ危ないから、今日中に病院行きなさい?」

「うん、わかった。でも、まずこの子にご飯あげなきゃ。」

2人はそれはそれは素晴らしい笑顔を浮かべていたところに記述する。「でも、ご飯って何あげよう?」

「あつ!じゃあ私が今日持ってきたお弁当のオカズをあげよう!」

そついいながら、ゴソゴソとカバンをまさぐり

「これだ!」と

ウイダーインゼリーを取り出した。

「ねえ、スバル。あんたマジなの。ちょっと!私の目を見なさいよ!」

「だって!前にすぐくはやて隊長に怒られたことがあって!!私だつてやりたくなかつたよ!!」

「スバル!偉い人が正しいわけじゃないのよ!!」

なにげにティアナから爆弾発言が飛び出た気がしないでもないが、そもそも話は黒猫にご飯をあげようということだったはずだ、もはや黒猫はジト目をしながら2人の漫才を見つめている。

「じゃ、じゃあ、私のお弁当から分けてあげるよ！はい唐揚げね！」
となんとか空気を変えようとキャラコが黒猫の前に唐揚げを2つ並べる。

「じゃあ、僕はおにぎり一個！」

エリオは男子らしくまるっと大きなおにぎりを置く。

「あんた達ねえ、これから訓練するっていうのに、自分のご飯あげちゃって大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、これは食堂に着くまでの間を埋めるためのお弁当だから。」

「いや、だったらむしろ全部あげたら？」

そうこうしているうちに結構な量の食べ物黒猫の前に並んだ。
待ってました、とばかりに食べ物に食らい付く。

「よく食べるなー。」

「この猫さん、これからどうします？」

「飼い猫だったら、飼い主が見つかるまで預からないとだし、野良
だったら飼わないとなあ。」

「待ちなさい、そのどちらにもあんたの願望があらわれてるわ。」

「ダメかな？」とキャラコはティアナを上目遣いで見ながら訴えるも

ダメよと返される。

「ちゃんと、お風呂にいれてあげないと部屋じゃ飼えないわ。」
と自らのミートボールを黒猫の前に並べながらティアナは答える。
ここに、新人達は隊長達に黙って猫を飼うことを決定した。

「ところで」

「何よ、エリオが一番最初は私が一緒に寝るのよ。」

「いや、そうじゃなくてね。」

先程までの疑念はどこへやら、黒猫が一心不乱にご飯を食べる姿を
みて思うところがあつたようだ。

「なのは隊長とフェイト隊長は？」

「まだ来てないわ。」

これはまた珍しいこともあるものだと思バルは本当に驚く。

「ほら、あれよ。管理局の魔道士が。」

「なにそれ？」と思バルは首を傾げた。

「あんなね、入院してたからってテレビくらい見なかった？」

「テレビ？見たような、見なかったような。」

まったくまた説教をしだしそんなティアナを遮ってエリオが答え

る。

「実は先日、管理局に勤める魔道士2人組が殺害された事件があった。」

「その事件の捜査や会議で隊長達も忙しいらしくて。」
とキヤロは育ての親と言える彼女の顔を思い浮かべる。

「え？じゃあ、今日は隊長達は来ないの？！」スバルは今度こそ驚いて返してしまうが、いやとティアナは首を振った。

「後でくるそうよ。あんなに忙しいのにわざわざ私達の訓練をしっかりしてくれるのだから、私達も必死でやるわよ！」

その言葉に新人達は決意を新たに気合いをいれる。

「そうか、じゃあ、しばらく邪魔はねえって事だな。」

「今、誰か」

しゃべったと聴く前にティアナは何かに凄まじい力で足払いを受け、その場に倒れ伏せ、さらに頭を地面に押しつけられる。
なんとか体を起こそうとしてもお腹に何かぎゅっと腰を下ろしている。

「あ、あんだ一体?!」

「おっーと、動くなよ。」

ザン、と強制的に仰向けにさせられたティアナの首の横に長い鉄の

ようなものが突き刺さっている。

「よしよし、分かるよなあ。動くなって言ったのはコイツだけじゃないぜえ。後ろから何しようとしてるんだ坊主？」

「くっ！」

後ろから自分のスピードならと考えていたエリオはその身を固めてしまう。

しかし、一体これはなんなんだろう。

「オイラに言われたからって動きを止めちまうのか？つまんねえな、自信がたりねえ証拠だぜ？」とゲラゲラ笑うソレは……。

「しかしまあ、お前の腹の上はちいっとだけだが座り心地がいいなあ！バーさんの膝の上みたいだな。」と褒めてんだか貶してんだからわからないセリフを腹の上でのたまうソレは。

黒猫であった。

猫は猫（後書き）

この黒猫はキッド編とゴロー編を足して2でわったような奴ですが。

正義の味方にしないように頑張ります。

穩便にすますために(前書き)

テスト中だけどやりました。後悔はしてない。

穩便にすますために

目の前で起きた事態の理解には時間がかかった。

もし、この事を間接的に誰かに聴いていたとしたら自分は信じはしなかっただろうとエリオは思う。しかし・・・

「あんた！何してんの！？何者なの！？何がしたいの！？」

「お前等を脅しているプリティーキャットだ。ついでに聴きたいことがある。分かったら黙れ、自分の背中が見えるようにしてやろうか？」

混乱しわめき散らす仲間の腹の上でニタニタと下品にしかしこれ以上なくくらいに愉快そうに笑う黒猫。

これが先程まで、あんなに大人しかった猫なのか？

「ティアナ！くそっ！お前そこから離れる！！！」

「フリード！」

スバルがギョツと拳を握りしめ、キャロは先程まで気分転換にと近くで遊ばせていた相棒である小さな竜を呼び寄せた。

しかし、それを見た黒猫は少しも動じない。

「スバルだっけか？無理すんな。お前のできる主な攻撃方法ってのはその拳だろ？下手に動くと取り返しがつかなくなるぜ。」

「な、なんでそんなことが分かるんだよ！」

自らの武器を見破った上で牽制を仕掛けてきた猫に対し動揺しながら訊ねる。

「いや、なんかバカっぽいしそうかな?と。」

「猫にまで指摘されたあ!？」

「街中であんな奴見かけたら猫でも思うわ。」

しかし、なんでかエリオはイマイチこの雰囲気は締まらないことに違和感を覚えた。

確かに今この場で起きていること全てが違和感の塊であることは分かる。

猫とスバルが繰り広げる珍妙な掛け合いが物語っているように。あの猫は存在するだけでシリアスを問答無用でコメディにしている。

しかし、それ以上に

「ああ、そんでキャラ? ややこしいな……。まあいい。その隣にいんのは竜か? よくわからんがソイツはお前の手下か?」

手下という表現には拒否感を覚えつつもキャラは油断なく頷く。

「本物の竜かよ! ったく、なんでもアリだな。さすがは魔法の国。非常識にも程がある。」

「ちよつと待ってください!」

「ああ？」

黒猫がジロリとエリオの方を首を向ける、しかしスバル、キャロに対する牽制か自分の倍以上ある剣をティアナの首筋にあてている。

「エリオ？だよな。なんだなんか質問か？」

「はい、まず貴方の名前を教えてください。」

「嫌だね。」

「はい？ど、どうしてですか！！」

まさかこんな質問にすら答えてもらえなかったエリオは焦る。

「弱い奴には教えてやんねえ知りたきやオイラに勝ってみな！」

ダンつと、黒猫はいきなりティアナの腹を蹴飛ばし高く跳んだ。その瞬間にはもうエリオの顔の目の前に影は迫っていた。

「ホイサっ！！」

回し蹴り一発がエリオの顔面にぶち当たりエリオはそのまま後ろ向きに吹っ飛ぶ。

目の前がチカチカする感覚に起き上がれずにいるエリオの腹の上に誰かに踏まれる感覚があった。

「さーて、次はどいつかな？」

「ぶざけないでよこの野良猫！去勢されたいの！？」

「てめえ！人間にやあ分かんねえだろうなあ！？そっいわれた時の絶望はよお！！！」

やっと起き上がることができたティアナは黒猫を睨み付けながら怒鳴るも、その言葉に激しく反応を返す猫であった。

「はなれてよ！！！」

「うん？」

「キヤロ？」

「エリオ君から・・・」

隣にいた竜がパカリと口を開けたかと思うと口内に炎がたまっていた。

「離れ！！！」

「よしわかったストロープ！！！！！」

黒猫の絶叫に先手をとられ気が削がれてしまったのか竜の口から炎が飛んでくることは無かった。フウ、と冷や汗を拭うような仕草を黒猫が見せる。

「OK、キリがねえ。少しだけ本当のことをしゃべろう。オイラの名前はクロだ。」

「「「「・・・」」」」

「・・・」

「「「それだけ？」」」

「ダメ？」

「・・・エリオ君から！」

「そこから始める意味はないだろ！？」

人質をとってるのに、と言いながらもエリオの腹を片足で踏みながらクロとなのつた猫はその場にいる人間達を眺める。

「聴きたいことがある。」

クロの言葉に全員が身構える。

「一つ、お前等は「管理局」とやらの手下か？」

「広い意味で捉えたらそうなるわね。まだ見習いだけど。」

ティアナの言葉に「へえ、そうかい。」とニタリと笑いながらこちらを見てくる。

心なしか先程以上に隙がなくなってきた気がする。

「二つ目の質問、これが最も重要だな。」

ゴクリとスバルが唾を飲み込む音がした。

「その管理局で猫狩りは流行ってるか？」

「ね、猫狩りって？」

キヤロが訊ねようとした瞬間に

「質問中はお前等の質問は一切受け付けねえ。」
と抜け目なくクロが返す。

「そんなの聴いたことがないです。噂にも聴きません！」

クロに足で踏まれているエリオが答える。

するとクロはエリオの顔にグツと近寄りその目を覗き見る。

エリオも睨み付けるようにその目を見る。

(あ、綺麗な目だなあ。)

とエリオは唐突に感じた、こんなに下品に笑っているのにどうして猫として申し分のない目のきらめきである。

そうか、とクロは頷きまたもや皆を睨み付けた。

「お前等がさつきまで話してた魔法使い二人がやられた事件の犯人はオイラだ。」

「……!?」「」「」

「オイラは本当は、他の世界から来た存在。本来なら時空漂流者として保護される。そいつらがオイラに説明したことだ。」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！あんた何を言って」

「だが、奴らは隙を見てオイラに杖を向けてよくわからん攻撃を仕掛けてきた。」

「!？」

「ぶっ飛ばされて危うく殺されかけたオイラだったが不意を突いてギッタングッタンにすることに成功した。」

足に噛み付いて、焦っているところに爪で顔面の目を狙って引き裂いた。

思いつきりぶん殴って地面に叩きつけた。

それでも攻撃しようとしてきた奴を捕まえて近くのビルの窓ガラスに向けて投げつけた。

殺すつもりでやったし、死んだかもしれない。相手の攻撃が急すぎて武器を使うタイミングを逃してしまったのが誤算だ。

「そんなこんなで、今のところオイラは管理局って組織の人間を信用してねえ。」

それどころか、ただの人間だって信じちゃいねえ。」

新人達は息を飲んだ。このクロと名乗った猫の発する空気はなんとなく自分達の隊長達によく似た迫力を感じてしまう。この猫はただの猫じゃない……!!

「私の教え子達に何をしてるの？」

クロがバツと顔を上げると栗色の髪をサイドポニーにした白い服を着た女性がいつの間にか目の前にいた。

「チツ、おいおい随分来るのが遅かったが、これからってとこだけ？」

少しヤツカイな事になりやがったと、嬉しそうにニタつくクロ。

「大丈夫？皆怪我はない？」

教え子達を背中を守りながらも杖はしっかりとクロにむける女性。クロはゆっくりと剣を握り締めながら周囲を見回す。

（くそっ 囲まれちまった！）

金髪

赤髪

チビ

犬

犬の必要性がイマイチわからなかったがどちらにしろ「おもしろい」ことには変わらない！

「何をしてたのかな？猫さん。」

ニヤニヤしながら猫は言う

「少し、物事を穏便にすまそうとしたらこうなっちまったんだよ。」

胸をパカリと開いて腕を突っ込んで引き抜くとその手にはガトリングによく似た銃火器が取りついていた。それを女性に向けながら続ける。

「安心しな、いつものことぢや。」

世界最強の猫が牙を剥いた。

穩便にすますために（後書き）

ついに会った疫病神と魔王

好奇心と共に死す（前書き）

バトルと好奇心は猫を殺してしまうのか？

好奇心と共に死す

ニタニタ ゲラゲラ

本当によく笑う猫だ。

大事な教え子の一人を足蹴にしながらこちらを見ている黒猫をなのはは睨み付ける。

いつものことだ

そう黒猫は言っていたが自分が言ってなんだがこんな風に囲まれることがいつももあるような猫は普通じゃない。
そもそもあれは普通ではない猫だ。

猫は二足歩行はしない

が、今現在エリオを踏みながら立ち続けている。

猫は普通喋らない

「なんだ？びびったのかよ！やーい、やーい弱虫毛虫の魔女っ子さーん！悔しかったらかかってこいよー！」

が今現在腹立たしい言葉をごく丁寧にメロディまでつけて自分に、いやこれは自分達にだろうか？

ただでさえ仲間を傷つけられ苛立っているヴィータの殺気がマックスになっている。

まだ待つてと一応あちらに目線を送る。

(そして一番おかしいのは……)

身につけている武器

武装した猫なんてものは初めて見る。

右手に剣、左手に銃火器(ガトリングだろうか?)を身に付け、しきりにこちらを挑発している。

手に持つ武器の不穏さに反して挑発の内容は幼稚で「バカ」だの「マヌケ」だの「ババア」だの……なんだと?

「猫さん今なんて言ったのかな?」

聞き間違いかと思ってもう一度聴くことにした。

さすがに勘違いで仕留めてしまうのは申し訳ない。

「はあ?聞こえなかったかあ!ババアって言ったんだよ!!いかにも仕事にかまけて婚期を逃しそうな雰囲気をもとってっからよ、ババアとしての将来有望株じゃねえか!」

こ、殺す!

「誰がババアだこの猫猫猫!猫ー!!!」

ヴィータが騒ぎだした。もういいだろう、お話はすんだ。すんだったらすんだ。やるしかない。そう思って猫を見る。

「最終通告だよ？大人しくしてくれたらそちらのお話は聴きます。」

答えは分かっているが

「オイラが命令を聴くような奴に見えるか？」

まったく見えない。ジリジリと緊迫した空気が高まっていく。

「ちなみに猫さん。」

「んだよ。」

「その手に持つ武器は質量兵器。持つてるだけで犯罪だよ？」

フンつと鼻で笑われる。

「てめえらの魔法の力とオイラのガトリング、どっちが危険かってか？そんなつまんねえことオイラに聴いてどうすんだよ。」

凄惨に笑いながらこちらにガトリングを向ける黒猫。構えながら、後ろの新人達に退却命令をだす。後は、猫に踏まれているエリオだけ。

「そもそもなあ。」

始まるか

「猫のオイラに人間の決まりごとなんざ関係ねえんだよ!!」
ズドンッ!と音がして数秒後
黒猫の真後ろで爆発が起きた。

「!?!」

てっきり自分の方になんらかの攻撃をしてくると思っていたのは
は面食らう。それ以前にあの黒猫の真後ろにいたのは・・・

「シグナム!?!」

「かかったな、なんかかませ犬っぽい臭いがしたから先に潰しと
いたぜ。」

何食わぬ顔でそう語る猫の尻尾から煙が出ている、さらに先っぽが
少し欠けている所を見ると

(ミサイルかな?なのは。)

(たぶんそうかも。うわ、色々とムチャクチャだよあの黒猫さん
。。。)

とんでもない奴がやってきたと内心ブルーになるも、それも言っ
られない。

(こつなったらやるしかないよ!私が黒猫さんに連弾で打ち込むか
らそのうちにフェイトちゃんとザフィーラはトップスピードで攻撃
して!ヴィータちゃんには隙について思いつきりお願い!じゃあ散開

っ!!」

(了解、見てろよあの猫!!)

「よっしゃあああ!!往生せいやあああ!!」

自分を囲んでいた人間が散つたのを合図にクロは今度は目の前のはまで突っ走り全力で横風ぎに剣を振るう。

「甘いよ。」しかし、剣を擦り抜けるようになのはは空に飛んでいく。

「あ!?!ずっこい!!」

「そっついながらしっかり銃をこちらに向けてるでしょ?今度はこっちから行くよ!スターライト」

「ヤバ」

イまで口にする時間は無かった。

「ブレイカー!!!!」

「んなあああああ!!!!」

ピンクの光が最初は一筋の塊だったものが、何本にも別れながら口に突っ込んでくる。

チュポポポーン

と地面にぶつかるとともに凄まじい爆発が起きる。

「ギヤアアアアア!?!」

ひゅーん、飛んでいき近くの木にぶつかりようやく止まる。ふらつく頭をなんとか収めようとガンガンとコメカミの部分殴り強制的に意識を戻す……が

凄まじいスピードで今度は金髪が突っ込んできた。シャッと手に持つ巨大な鎌のような武器を迷わずクロの首目がけて放つ。

「オラア!」

無理にかわすには身体が追い付かないと直感し、ままよ!とばかりに足を振り上げ向かってくる鎌を蹴とばす。

「くっ!」

少しばかり腕が痺れたのか金髪の少女は鎌を持ちなおそうとする。

「オラオラオラあ!!」

ズガガガとその隙を逃さず少女に容赦なくガトリングを乱射するクロ。

しかし、少女は迫りくる弾丸を数発鎌で防いだあと突っ込んできたときのスピードと同じ速さでクロから離れる。

「早すぎだろありゃあ!」

さすがのクロも呆れたように吐き捨てる。

「オオオオオ!!!」

「うん?」

「ぶつつぶれるお!」

と思いつき振りかぶられたハンマーがクロにせまっていた。

「やってみろよ!このチビ!!!」

ギイイインと金属同士が耳障りな衝撃音をあげた。

「てめえ!シグナムの仇だ!!!」

チビが全力で力を込めてクロとツバ競り合う。

後に遠くから見ていたフェイトが「正直、微笑ましいものを感じた。」と語っている争いだが二人は大真面目だった。

「よお、チビっ子お。今日のところは飴ちゃんやるから帰ってくれねえか?」

「ふざけるな!お前を倒して飴ちゃんも貰っつ!」

グググつとお互いに押し合い勝負はつかない。

ガトリングは完全な力勝負には邪魔なので捨てている。

しかし、クロはチビが笑っていることに気付く。

「まずった!?!」

「遅いぜ、今だザフィーラ!!」

ガリつと、クロの頭はまるまる噛み付かれた。

ザフィーラと呼ばれていたいる意味がわからなかった犬が今まさに大活躍しているのだ。

「行け!噛み砕け!!」

「かふあくてむひ(堅くて無理)」

「あ、ああああががが!」

頭に走る激痛に叫びだすクロ、もらったとヴィータは確信した。

「なんつってな。」

ケロリとした顔でクロは呟く。

ハア?と惚けるヴィータに

「おらよ持つてけえ!!」

と同じ惚けたようなザフィーラとかいう犬の首を捕まえテコの原理で思いつきり身体を折り曲げながら振りかぶって投げつけた。

「うそお!?!」「キヤイン!」

ザフィーラが凄まじい勢いで突っ込んできたために避け切れず直撃してしまったヴィータはそのままザフィーラの下敷きになったまま伸びてしまった。

「しっかりとお淑やかに躡けてからオイラの相手をしてくれ。」

よし、かませ犬どもは片付いた。

後は

「てめえらだな。」

「すごい、本当に強いんだね。」

上空に浮かぶ白い少女

「驚いた。魔法も使わないで、しかも途中武器すら使わなかったし。」

同じく上空に浮かぶ黒い少女

「そりゃそうだ、オイラ強いもん。」

単純な問題なのだ。これはただどちらが弱いか決める戦いだ。いや、戦いは弱い奴を決めるために戦う。

正しいとか間違ってるとかそんなしょうもないことに命をかけてどうする? クロはただそれだけのために戦う。それだけだから真っ直

ぐになれる。

「お互いに喧嘩売りあった仲じゃねえか？元氣よくやろうぜ？」

またもやニヤリと笑う。

そんなクロを見ているうちになのは不思議な気持ちになった。いや、もっと単純な感情、これは。

（胸がスウつとする？）

爽快感と解放感、目の前で笑う猫を見れば見るほど清々しい気分になる。

そしてもっと全力でやりたい！という気持ち。

それは子供の頃買ってもらった自転車ですつまでも走っていたくなるようなそんな感覚……。

（フエイトちゃん……。

）

（うん、なのは。）

彼女も同じ気持ちだったらしい。

だったらとなのはは黒猫に向き合ってニコリと笑う。

（へっ？）とクロが思わず気が抜けてしまっほど朗らかに。

「黒猫さん、あなたのお名前はなに？」

なんだ、分かってんじゃねえか。と顔を笑みに戻す。

「弱い奴には教えてやらねえ。」

「うん、じゃあ。私は猫さんに勝って見せるよ！」

「よく言ったあ！！いくぞ女あ！！」

「デイベンバスター！！」

ドオンっとなのはから放たれた巨大な光

（あれ？）とクロは気付く。

「これ、無理じゃね。」

クロは剣しか持っていなかった。

「や、やってやるわあ！！」

ドウンと、本当に大きな爆発がクロを中心に起きた。黒い煙が風に飛ばされた時に見えてきたものはクレーターだった。

（全力でやった。私にできる精一杯……。）

しかしやっちゃってしまって気付いた。そもそもの目的はあの猫を倒すことではなく、新人達の救出であった。

さらには、きちんと彼の身元を確認しなければならぬのに彼のペ

ースに乗せられるだけ乗せられてこうなってしまった。

(ど、どうしよう!?)

焦るなのは横で注意深くクレーターの中心を見ていたフェイトが声をあげる。

「な、なのは!?!」

「え?なあに?・・・て、ええ!?!」

クレーターの中心でユラリと今にも倒れそうな影が肩で息しながら立っていた。

「お前、名をなのりやがれ!」

こんなに嬉しいのはいつぶりか、状況もわすれてなのはは名乗る。

「なのは!高町なのは!?!」

「クロだ。覚えてやがれよ、なの・・・は。」

ドサリと黒焦げのクロは倒れた。

ー応、言うておくと

疫病神と魔王の最初の邂逅はこんな心温まる出会いであったのだ。

好奇心と共に死す（後書き）

果たしてエリオはどうなってしまったのか！まで次回。

お稲荷さんの次回を待ちながら。

小さい奴(前書き)

少し短め、お酒飲んじゃって進められない。
明日また新しい話として続き書きます。

小さい奴

「おー、惜しかったなー。穴のふちにはあたるようになったぞー？」
どういう状況かクロはティアナのバックから首だけだしながら、野次を飛ばしていた。

「うるさいわね！今集中してんだから話し掛けないでー！」

「へいへい。」

「見てなさい！絶対手に入れてやるー！」

「しかしまー、ぬいぐるみ一つとんのにどれくらい時間かけてんだよ。」

「うるさいって言うてんでしょー！」

お前が一番うるせー、と思いつつも周りを見れば激しい電子音で少しいの大声くらいじゃ誰もこちらに気付きそうもない。

「ゲーセンつても懐かしいもんだ。」

「なに！？なんか言った!？」

「お前は気にせず上司の尻拭いをしろ。もうすぐ日が落ちるぞ。」

「だからなに?!」

もうしゃべる気のないクロはティアナのバックの中に完全に引込む。

どうしてこうなったのか時間は午前中にまでさかのぼる。

「やっと起きたですか？」

ぼんやりとしたクロの視界に小さな人影が写った。

小さい自分の身体を覗き込めるような小さな影なんてそうそうない。

「な・・・な？」

「？？なんの意味がある数字ですか？」

今度こそ完全に視界のピントが合った。

目の前にいたのは小さな人形だった。しかもそれは羽があり、ペラペラと喋っている。

けったいな生き物である。そう思う傍ら、ほんの少しだけ気恥ずかしさを覚えているクロである。

小さな影というだけであの電気スタンドを連想してしまったことに對して何か否定したい、しかし誰に？

幸いと今の自分の恥ずかしさに気付けるような奴は周りにいない。

今日の前にいる人形は「なな、なな？？」と分かりもしないことを理解しようとしている。

ならばと、クロは恥ずかしさを頭から追い出し人形に話しかける。

「おい。」

「分かりました！」

といきなり人形は身を乗り出してクロの顔を覗き込む。

そして

「彼女さんのことですね！ナナさんというのは！」

「なんだって？」

「いえいえ言わなくてもわかるです！そうですね、あなたは寝ている時でさえ彼女のことを一時も忘れていなかったのです！」

「いや、断言されても。」

「みなまで言うなです！」

「その言葉は地の文以外では使わねーよ。」

「いやー、素晴らしいですね。離れていても繋がっている心！まさに愛です！」

「だから」

「彼女さんはおいくつです？」

と芸能レポーターのようにマイクを構えるふりをする人形

ブチ

「どこにお住まいです?」

ブチ

「品種はなんですか?」

ぷっつーん

「ええ、報告通り黒猫だと思っていましたが実際はなのは隊長の攻撃により黒焦げになっていただけでした。」

と白衣をきたシャマルが隣にいる人物に報告する。
スーツを着た少女、はやては難しい顔をしている。それもそうなのだ。

「んで、その黒焦げくらいは綺麗に取ってやろうと洗ってみたところ。なんとビツクリ、ピッカピカのメタリックボディがでてきましたよ! ってわけやな。」

「ええ、検査を行った結果。彼の身体の大部分が機械でできていることが判明しました。」

「シャマル、さっきの台詞で私がジャパネットの社長のモノマネをしたことには触れてくれへんのか?」

「そして、彼のことですが昨日六課の隊長陣五人と大立ち回りを繰り広げた末に気絶、今は救護室のベッドにいます。」

シヤマルのはやてのポケ強化月間に対する対処法は「無視」という最も残酷な正解であった。

「へ、へえ、そうなんかー！今誰が見張りしとるん？」

涙を流しながらも、主人として、隊長として倒れることだけは耐え切ったはやてであったが、褒めてくれる人はいなかった。

「リインです。」

「ふーむ、しかし未来からきたサイボーグが知らんが猫はないやろ。緊張感にかけるわ。・・・シヤマル、腹にポケットはあったか？」

「ポケットはなかったですが、武器庫のようなものがありました。」

「武器庫で、精々拳銃一丁くらいちゃうの？」

「ガトリング二丁、何でもきれそうな剣一本、しゃれにならない銃多数、しゃれにならない爆弾三個、にわたりの着ぐるみ一着が確認されています。」

はやては廊下から空を見上げた。青く、澄み切った広い世界。あんな所を飛べたならきつと素晴らしいことだろうな、と思う。

「なーシヤマルー、なんか私疲れてもった。」

「はやて隊長、まだまだこれから疲れることになりますよ。・・・
ここです。」

はやてはげんなりしながらも顔をあげた。
そして、顔を引き締めてドアをコンコンとノックする。

「はやて隊長？」

何をしているんですかといいたげに見てくるシャマルに

「ティアナ達の報告となのはちゃん達の報告から考えるに相手はこ
ちらに敵意をもつとる。」

て、ことは。

「相手にこちら側がそれなりに常識的やと知ってもらわなな。」

なるほどとシャマルは納得する。

が、しかし中からは反応がない

「？」

コンコン、コンコンコンコンコン

と何度も叩くはやて、もう常識的とは言えなかった。

「るっせえー!!」

と中から怒鳴り声が聞こえる。

試しにもう一度コンコンと叩く。

すると

「うるせえつての！開いてるから入れっ！・・・ああもう！お前には言ってるのに！」

はやてとシャマルは顔を見合わす。「入れ」とは言われたが向こうはそれどころじゃないみたいだ。

「ま、おじやましーす。こんちわ、気分はどうや猫く・・・ん。」

「ぐす、ひっく。えぐ。」

「いやだからな。さすがに悪かったって！いきなりぶったりして、謝るよ謝るから。な？」

部屋の中では猫と妖精が揉めていた。

揉めているというより、猫の方が一方的に妖精・・・ラインに謝っている。

「い、いえ。リ、ラインの方がわる、わる悪かったですう！嫌なこととしてごめんなさいですう！！！」

「お前は悪くないって言うてるだろーが！話聴いてたのかよテメーは！？」

「うわーん！やっぱり怒ってるですー！！！」

だーかーら！と猫がまたもやラインに言葉をかけようとした時に

「えーと、ちよつとちよつと?」

「あんだよ?今立て込んでるぞ?」

とクロは苛立ち、いやこの場合は珍しくクロは焦っていた。どうにも自分は泣かれると弱い。勝てる気はしないというより勝とうという気が失せる。

「まー、そうやるうけど。これから慰める時間ならたくさんあるし、長い付き合いにもなるから、今は時間かしてや?」

「ああ?」

いかにも迷惑そうな目をクロから向けられたはやてはその視線を受け止めながら告げた。

「なあ?サイボーグのクロちゃん。」

おまけ

「おーい、ティアナお前こんなにフィギュアだけ集めてどうすんだよ?結婚する気か?」

「うるさいわねえ、だ・れ・の・た・め・に!やってることだと思ってるのよ!」

「いや、だってこつも見事に青い髪の奴だけとれるのか?よく見る

よ赤いのだっているのに。」

「黙りなさい、ヒゲ切り取るわよ。」

「あんまり、現実と虚構を一緒にするなよ？汗かいて、飲み食いするのが生きる醍醐味だぞ？」

「ぬああああ！」

「!？」

「なにが悲しくて猫に人生論を説かれなきゃなんないのよー!？」

見てなさい絶対に！と何度目か分からない台詞を吐く。

「UFOキャッチャーは貯金箱・・・か。」

人間にしては的を得た言葉である。

小さい奴（後書き）

クロは心底女から惚れるから、自分からフォローとかしないでいい。

まー、できないってイメージが強すぎです。

尻尾はみせるな(前書き)

もう四時か・・・

明日やるといいましたが、飲みで寝てました。すみません。

でも小説も楽しいです。ストックはなからありませんので、これからもういろいろとありますよ。

尻尾はみせるな

めんどくさいことはめんどくさい。

やりたくないことはやりたくない。

しゃべりたくないことはしゃべりたくない。

しかし、今はこれと言ってそんな気分ではなかった。クロは目の前の人間に自分のことを話すことに大したためらいはなかった。

「そして、オイラは死にかけたがそんなこんなで機械の身体になっちまったのさ。」

クロはつまらなさそうに自分の身の上話をはやて、シャマル、リインに向けてしていた。

しかし、はやては少しだけ違和感を感じていた。この猫と実際に戦った者達の証言から大層「クレイジーな戦闘バカ」であろうと予想していたのに、今のクロはベッドに腰掛けながら落ち着いた素振りを見せている。

「あんだ、随分とクールやな。自分の知らん世界にきとるのに……」

いつそ呆れを覚えてしまいうくらいだとクロに問い掛けるも

「その知らない世界に来てしまったいたいけな猫に五人がかりとは、いい仕事するもんだな。六課ってところは。」

と皮肉られる。が、はやてとしてもそんな事でおじ気づく程やわではなかった。

「そうは言ってもなあ。あんたもあんたやでいきなり可愛い部下達に襲い掛かってきて。生きてるだけでもありがたいと思ひ。」

最初、この猫が皆にしたことを聴いたときはハラワタが煮えくり返った。会ったらぶん殴ってやるうかと思っていた・・・しかし

「いやー、そいつは気にすんなよ。ただの事故だ。」

とカラカラと笑いだすクロを見るとこれ以上話す気が起きなくなる。許すことはできないが、こいつにはこれ以上言ってもムダだとはやては気付いた。

それは案外正しい判断だったのだろう。

「はやてちゃん、クロちゃんは元気？・・・あ！目が覚めたんだ！」

「なのは、クロはさっきまで倒れてたんだから、あんまり騒がしくないでござう。」

クロがドアを見てみると、なのはとフェイトが入ってくるところだった。

なのはは嬉しそうに、フェイトはそんななのはに苦笑しながらクロの様子を見ている。

「よう、なんだトドメでもさしにきたのか？」

冗談なのか本気なのかジト目を2人に向けた後、ごろりと横になっ

てそっぽをむくクロ。

「嫌だな、そんなんじゃないよ!。」

なのははクロのそんな姿をみて笑っている。

「そんなに負けたことが悔しいの?」

なのははクロに問う

クロは強かった。こちらが非殺傷設定をしていたとしても隊長クラス五人相手に互角以上で渡り合っていた。そんな力をもつ存在である自らの敗北を受け入れられないという思いがあるのだろう。

と、なのはは思っていた。
が

「バカかお前。」

自らの観察眼は辛辣な評価をいただいたようだった。

「悔しくないの?」

「いちいち負けたことなんて覚えていねえ。故にお前に負けた記憶はない。つまりオイラはお前に負けちゃいない。」

ここまでの意地っ張り人間にだってそうそういない。なのはは苦笑いをするしかなかった。

そんな、なのはをチラリと確認した後、クロは再び思っ。

(覚えてろよ。)

ようは根に持つタイプなので悔しいとかそついう事以前に一度戦ったら勝つまでクロの戦いは終わらないのだ。

「おい、黒いの。」

とクロはジロリとフェイトの方を見る。

「な、なに？」

クロの力は戦って分かっている。あの時は仲間と連携をくんでいたが、一対一で戦えば結末は分からない。

さすがに、いきなり暴れだすとは思えないが……、いやいきなり暴れだすのはありえない話ではないだろう。

「名前は？」

少し緊張していたフェイトだったが、拍子抜けしてしまう。

「フェイト。フェイト・テストロッサです。」

「クロだ。」

一通り自己紹介をしあったフェイトだったが少し疑問に思う。

「ちょっと待ちい、あんたは確か新人達に「名前は弱い奴には教えてやんねえ、しりたきゃオイラに勝つてみな。」っていいながら暴れだしたって聞いたで。なんでそんないきなり素直に自己紹介すん
のや？」

直感だけで物まねをしたバカ野郎をなんとか打ち殺したかったが、残念ながらガトリングは没収されていた。ふう、とクロはため息をもらし部屋にいる人間達を見渡す。

「あれはな」

何か特別な理由があるのかとなのは達は息を飲む

「喧嘩を売るための詭弁だ。」

『・・・』

啞然、呆然の視線をシレッ受け止めながらクロははやてに訊ねる。

「で、なんだよオイラに用があるんだろ？」

「いや、その前にこの二人にあんたの事を教えただって？」

これから長くなるのだから、クロという存在がなんなのかを二人に知っていてほしい。なにせ、『証言』がすくないのだから。

「私も知りたい。クロちゃんがなんなのか、聴かせてよ。」

なのははクロの目を見る。

「チッ、分かったよ。いいか？」

「そして、オイラは死にかけたがそんなこんなで機械の身体になっちまったのさ。」

「ちょっと待ちい。それ前も聴いたで。」

「二日酔いで徹夜したらこうなるんじゃないの？作者的に」

なのはとフェイトに自分がサイボーグになった経緯を説明するが、説明しながらクロはイライラしていた。この話は好きじゃない。好きじゃない話をするのはもっと好きじゃない。もう、いいだろと思い、とっとと話を進める。と暗にメッセージを込めて眉間にしわを寄せて目を閉じる。

「へえ！じゃあその博士さんって凄いなだね。クロちゃんの命の恩人なんだ！」

と空気の読めない女が一人

なのはである。

「ぶっざけんな!!」

横になつていた体をはねるように起こして。
耐えかねたようにクロが怒鳴る

「勝手に身体いじくって、勝手にオイラの人生までいじくりやがって！それで感謝だと？」

「じ、じゃあクロちゃんは死にたかったの？」

「質問を質問で返させてもらうが。じゃあ、なんで普通に猫型ロボットにすりゃあ良かったとこをあのバカは戦うことを目的としたサイボーグにしたんだ？」

なのはは黙りこくったが「でも、」となんとか言葉を探そうとしている。

それを見たクロはため息をつく、少しだけこのなのはとかいう女がどんな人間か分かったよ気がする。

しかし、それは本人に言っても仕方がない事だったのでクロはそれについては考えずに言葉を続けた。

「それにな、これはオイラの生き死によりも大切なもんにかかってくるんだよ。」

フェイトはそんなクロをみながら、過去を見ていた。「どうしようもないままに作り出された存在」として、創造されたのではなく創作されたものとして。

「命より大切なものってあるんですか？」

だからフェイトはクロに聞いた。それは単純な興味だったのか、それとも・・・

「誇りだよ。雄猫としてのな。」

生きてようが、死んでようがそれは変わらないとクロはサラリと言つてのける。そんなクロに俄然と興味がわいてくるフェイトであった。

「よし、じゃあ始めようか皆」

だいぶ話がそれってしまったのではやては空気を締める。

「クロ、あなたに事情聴取を行います。」

先ほどとはうってかわって無表情にてっするはやてをみてへいへい、と適当に返事をするクロ。

「ティアナから聞いたで、先日の管理局の魔道士の殺害事件の重要参考人としてあなたが浮上した。」

はやては徹底的に無感情に徹した。そうすることで相手の反応を引き出そうというのだ。カマをかけて、言葉を引きずりだす。果たしてこの猫は尻尾をだすのか・・・。

さっきまで楽しみに話していたのにこんな話をしなければならぬのかと、なのはとフェイトは暗い顔をしている。

そしてクロは

「猫だから参考「人」じゃねーよな？」

全力でとぼけてきた。

「なんでやねん！あなたが前々回にてかっこつけて、新人達をおどしとつたんやるが！！証言もとれとるっちゅうに！しかもなんやその鬱陶しいとぼけ方は！！」

せっかくシリアスパートにいけると思っていたはやては非常識な猫に怒鳴り散らす。さすがに悪いと思ったのかクロはわかった！わか

った！とはやてを落ち着かせる。

「ああ、オイラがやったぜ。」

今度は、睨み付ける。その場にいる全員がクロの本質を垣間見た。さっきまでの全てはクロのペースに巻き込まれていたということ。様々な本音をぶつけながら、しかし本質だけはスルリと擦り抜けてしまう。

（これは油断ならんな。）

はやては目の前の存在の厄介さを思い知る。

「じゃあ、基本的にどんな暴行をしたんや。」

聴かれたクロは淀みなく自らの暴力を語る。自慢気ですらなく、無感情ですらなく、料理のレシピを読み上げていくように分かりやすく。

ここまでくるとさすがのなのはいい顔はしていない、悲しそうでいて怒っている顔である。

クロはその顔を一瞥しただけで大した感想は抱かなかった。

「へえ、そしてそこまでやって最後は自慢のガトリングでズドン！か、あんた最低やな。」

はやては冷たい顔をしてクロを睨むも、こんなものには慣れっこだった。

が、はやての言葉が引つ掛かった。

「ちょっと待て。今なんて？」

怪訝な顔をしながらはやては繰り返した。

「だから、そこまでやってガトリングで殺したんかと」

ダウト

「オイラはガトリングなんか使ってねえぞ。」

「はあ？じゃあ別の武器かいな？」

だからとクロは続ける。

「オイラはボコボコにしたが銃でトドメはさしてねえよ。」

「なんやと？」

驚くしかなかった。なにがどういふことが、はやてにもなものにもフェイトにも、その場にいた全員が分からなかった。

偽装工作？

誰が？

なんのために？

「よ、よし分かった。この件に関しては後で調べよう。色々ナゾが深まってもった……。」

はやてが頭を抱える。

「はやてちゃん、一緒に頑張ろうね!」

「なのはちゃん、やめて?励ましが辛い。」

はやてとなのはの掛け合いで少し空気が緩みはじめた。なんとも分かりやすい者達であるが

そうは問屋がおろさなかった。

「じゃあ、クロ。あなたにはしばらくここにいてもらうで、まだまだ聴きたいことがあるからな。」

その言葉を聴きクロは、そうかと頷く。「ご要望にはお応えする。」

「クロちゃん、この世界のこと知らないでしょ?私たちが教えてあげるよ!ね、フェイトちゃん。」

なのはは言つとて無邪気に

「うん、まかせてよクロ。」

フェイトもなのはと同じ無邪気さをもってクロを見る。それはただの善意として本人は思っていた。

だが

「いらねえよ。」

クロはなのは達に応える。にべもなく善意を切り捨てる。

「え、だって初めてだし、誰からも説明なんて受けてないんでしょ？」

なのはを、いやこの場にいる全員を、「管理局の人間」を睨みながらクロは答えた。

「いや、受けたぜえ。説明なら。ここはミッドチルダとかいう魔法の国で、時空管理局とやらが支配していて、たまにオイラのような奴がこの国に流れつくこともあって、そんな奴を無事に帰してやるのが管理局の仕事なんだろう？」

誰から聴いたのか、なんとなく分かってしまった。

「オイラがボコボコにしてやった奴らから聴いたんだよ。」

「待って」

事態を理解できないのはが待つてくれと声をあげたが、それすら遮ってクロは畳み掛ける。

「さらに言えば、そういつて話を聴いて油断していたオイラにいきなり攻撃をしかけてきやがったんだよ。」

開いた口がふさがらない、そんな顔をしたはやてにクロは声をかける。

「猫に正当防衛は認められるのか？」

分かっていてクロは聴いている。

別に認められていても、いらなくても関係なくボコボコにしてやっただろう。しかし、ここで敢えてこういう事で交渉の手綱を握ったのは恐らくクロだ。黙っていてやるから武器を返し、釈放しろ。そういう流れにもっていくのだ。

別に、どっかの組織が潰れようがどうしようが関係ない。腐るなら勝手に腐ってればいい。

が

『・・・』

みんながみんな黙ってしまった。はやては必死に考えているのか、頭を抱え。

なのはとフェイトは顔面蒼白である。

あほくさい、そこまで本気になってどうする。よしんば真実だったとしても事実を報告した上で世の中にさらせばいい。

(まさか)

こいつらは自分のいる場所の汚らしさを『いまさら』知ってシヨックを受けているのか。

自分たちは正義でなければならないのに、それが裏切られてしまったと思っっているのか。

(んだよ、結局はガキってことだな。)

話の中で聴いたが、今ここにいる少女の年齢は十九かそこらだと聴く。その若さでこの機動六課とかいう組織の頂点を形成している中

心メンバー。

なるほど、だったら『こうなる』のは不思議じゃない。

そんな奴らに対して大人の自分ができることをする。

「まー、落ち着けよ。なにも本当に管理局の人間がやったと決まっただけじゃない。誰かが成り済ましていた可能性も高い。」

全員がクロを見ている

この言葉にはウソはない。狭い見ではなにも分からないはまだ。

混乱からいち早く生還したのは、はやてだった。

「だとしても、わからんことはまだある。なんでクロが外から来たことを知っていたのか？そもそもなんで襲われたのか？」

次に生還したのはフェイト

「次元震が起きたときの反応ぐらいは調べられるんじゃないかな？」

最後はなのはだった

「うん、なににせよ。クロちゃんを襲うなんて許せないよ！！」

オイラに怒ったり、人間に怒ったり忙しい奴である。

「おい、なのは。」

「なにクロちゃん？」

「お前、車にひかれた猫みてどうおもう？」

答えはわかっていたが聴いてみたかった。

「え？可哀相だなんておもうけど……。どうしたの急に。」

「いや、別に。」

クロはもう、笑いたくなくなった。

目の前の人間を平気で絶望させるような奴は、自分をそんな奴とは露ほども思わないだろうに。こいつみたいに。

「どうしたのクロ？」

フェイトが声をかけてくる、クロは切り替えようと思つ。

どうしようもない奴はどうにもならない。

だからこそ。

「めんどくせえことになりそうだなー。」

この猫は機動六課に住むことを自ら決めた。

尻尾はみせるな（後書き）

5時脱字とかあるかもしれませんが。ご奉公ください。

クロといっしょ『ゲーセンの書』(前書き)

ティアナといっしょ

クロといっしょ『ゲーセンの書』

「なんだってこうなった？」

目の前に置かれた黒焦げの何かがかつての猫の着ぐるみを、冷蔵庫にあった何年たったたか分からないほど古いたくあんを見るような目で見下ろす。

「ご、ごめんね？クロちゃん。」

着ぐるみを見るも無残なゴミクズに早変わりさせたのはは平謝りするしかなかった。

クロとしてはあれだけの戦いで自分の傷が着ぐるみ一枚という、まさに首の皮一枚で済んだ奇跡が起きたわけだが毎度毎度こうなるたびに死なないのが冗談のようだ。

例え非殺傷設定とかいうものがあつたとしてもだ。

「いや、別にいいけどよ。オイラが疑問なのはここまでボロボロならいちいち持ち主に見せる必要ないだろってことなんだが？」

新しい嫌がらせだろうか？

「あんたに特別な思い入れがあるかもしれんと思つてな。最期の別れでもどうや？」

思い入れと言われても、MADE IN CHINAにしては今まで丈夫だったなと思うぐらいだ。

起きた途端に妖精モドキと揉めてしまったために意識はしなかったが、クロは現在メタリックな素肌(?)をさらしている状態である。

今までなんどか、燃えたり、撃たれたり、斬られたり、潰されたりした。それでもこの着ぐるみは無事だったりしたのだが、さすがにあの大砲だけは防ぎようがなかった。

「どーすんだよ。スぺア持ってきてねーぞ？」

「あのニワトリはなんなの？」

「なに？オイラまだアレ持ってたのか。つーか、お前誰だよ。」

今まで全然気にしてなかったが、金髪の大人じみた女がこの部屋にいるのに気付いた。

「ここ機動六課で医務官なんかをつとめているシャルよ。よろしくねクロくん。」

シャルとしては、さっきまで主人及び仲間達を手玉にとっていた存在。

なめられなくなかったので少し大人びたような態度で接することにした。

「なんだよ。この中じゃ一番キャラが薄いな。」

ビキッ、とシャルは凍る。

繰り返すが、シャルは猫になめられなくなかったのである。

「なんか、こつ、年々影が薄くなっていったような雰囲気があるぜ？」

クロはなんの他意もなく相手の悪口を言う奴ではない、なんて奴で

はない。

この場合もそうだった。他意しかなかった。

ずーん、と沈みこみ。ラインと一緒にしよげかえるシャマルを見ながらはやてはクロを睨む。

「あんなあ、いいかげん私の家族にちよっかいかけるのはやめてや。」

クロはニヤニヤしながら「悪かった。」なんて言っている。
嫌な猫だ。

「よし、じゃあ行くか。」

クロはぴよいとベッドから降りてドアの方に向かうが

「ちよっと、待ってよクロちゃん！」

なのはは慌ててクロを引き止める。あまりに自然だったので、行ってらっしゃいを言いそうになった。

「あんな！どこ行く気や!？」

「オイラの着るもの探すんだよ。」

「着るものって？」

なのはは首をかしげているが、この件に関しては無関係な存在ではなかった。

「お前が燃やした！オイラの着ぐるみだよ！」

「ああ！忘れてた。」

ごめんごめんと頭をかくなのはを見ながら、こいつは天然かと疑うが、絶対天然だという確信もある。

「でも、クロ。着ぐるみってどこに置いてあるの？」

フェイトはクロに問う。さっきは断られたがやはりクロはこの辺の地理には詳しくないはずである。なら、自分たちが案内した方がいい。

しかし、自分でもクロの身体にあった着ぐるみなんて見つけれられるとは思えない。

「オーダーメイドの着ぐるみでも作ったるか？」

本気が冗談か、はやてはそんなことを言いだした。しかし、クロはそのどれにも首を縦にふらなかつた。

「いや、着ぐるみがある場所なら目星がついている。」

クロは自信満々に答える。

「へえ、そうか？」

「ああ、場所が分かる奴と若い奴さえいればなんとかなる。」

「それって、どういふこと？」

なのはは頭に『？』をたくさん浮かべている。

「着ぐるみは大体あそこにある……。」

「で、なんで私なのよ！」

ティアナは街を歩いていて。私服に着替えて肩には少し大きめのボストンバックをさげている。

ティアナがボストンバックに怒鳴るとモゴモゴと動きながらチャックの部分からクロが顔をだした。

「あんまり怒鳴ると人にみられるぞー、ティアナ。」

となんでもない事のようにクロは返す。

それにと続けてティアナに話し掛ける。

「これは結構理にかなった人選なんだぜ？」

どういうことか？とティアナは少し気になった。

「オイラはゲーセンに行く必要がある。そのためにはゲーセンの場所を知ってる奴がいなければならぬ。」

まず、なんでゲーセンに行かなければならないのかも分からないがここは少し黙る。

「だが、あいつらはとてもじゃないがゲーセンを知ってるような奴らではない。」

あの時、医務室でゲーセンに行くことを伝えただけなのはとフェ

イトに止められた。

なんでもゲーセンにはぎゃんぐとやんきーと大きいお友達という怖い人がたくさんいるところらしい。

いや、そんなのは二人のイメージの中でしかありえないのだが。

そんな理由で、エリオとキャロに連れていってもらおうという選択はフェイトがうるさかったので没。

しかし、エリオはクロに着いていきたかったらしいとフェイトは言っていた。 どういうことなのだろうか？とクロは思うがとりあえずそれは置いとく。

「で、お前に白羽の矢がたったのだ。」

そうか、だからフェイト隊長となのは隊長は私にやたら気合いをいれるようにと声をかけてきたのか。

というより、なんでまた隊長達もこんな危険な奴と私が一緒になることを許可したのか。

「迷惑な話ね。スバルは？」

「オイラ、バカ苦手。」

こんなにも友人を不憫に思ったことはない。ティアナはここにはいない友を想った。

「まー、そういうわけだゲーセン行ってオイラの頼み事を聴いてくれたらすぐに終わる。」

のんびりしようぜと欠伸をしながらモゾモゾとバックに戻るクロ。

今日は晴天なので、気温は高く日もよく当たる。猫にとっては嬉しい一日なのだろう。

しかし、自分はこんなことをしている場合ではないのだ。訓練をしたい。

ただでさえも自分は・・・

「キヤーっ！ひったくりよ！！」

ハッと気付き後ろを見ればバイクにのった誰かがおばあさんの荷物を奪ってこちらに走ってくるどころだった。

周りの人間が騒ぐ中おばあちゃんはワタワタとしてしまっている。

犯人はこちらに向かってくるがバイクを改造してるのかあまりに早く、自分が止めるのには間に合いそうもなかった。

「くっ！」

いっそのことバイクに身体ごとぶつけてでもと考えたその時。

ガスっ！！

バックから伸びた腕が猛スピードで走るバイクの運転手の首を刈った。

凄まじい音を立てて正面に転がっていくバイクと転がり落ちる運転手。

フラフラになりながらも盗んだバックを持って逃げようとする運転手の頭に今度は全力で拳骨が打ち下ろされる。

「・・・。」

唖然とするティアナだったが急いで運転手のところに駆け寄る。

こんな奴はどうでもいいが一応命は確認しておきたかった。

「どうだ?」

バックからモゴモゴと声がする。

「ああ、生きてるわよ?」

ティアナは盗まれたバックを手に持つと来た道に戻り始める。

「あいつ、いいのか?」

「いいわよ、どうせ誰かが牢屋にいれるわ。今はこっちが大事。」

と言いながら、一連の出来事に目を丸くしていた老人に笑顔でバックを渡す。

「はい、おばあちゃん。取り戻しましたよ。」

バックを受け取った老婆はすぐに笑顔をティアナに返す。

「ありがとう、お嬢ちゃん。世話をかけたね。」

「なんて事ありませんよ。」

そうついながらと照れたような顔をしているティアナをバックからこっそりとクロは覗いていた。

(へえ、コイツもこんな顔するんだな。)

意外なものをみて、そしてそれは気分のいいものだったクロは思わずニヤリとする。

その顔をティアナに見せるつもりはなかったが。

「ここよ。」

とうとう一人と一匹は目的地のゲーセンにたどり着いた。

「で、何が目的なのよ。」

ティアナに聴かれたクロは、いいから中に入れて指令をする。

ハイハイ、と返事をしながら中に入るティアナ。

ドアから先は、外とは別世界だった。

鳴り響く電子音に、ガシャガシャと何かをぶつけるような音。

最近まで来たことはなかったので少々ティアナは面食らう。

最後に来たのはそう、たしか・・・。

「ティアナ！ティアナ！！」

昔を思い出してポーツしていたらしい、この音すらも気にならなかつたくらいだった。

クロが呼び掛けなかったら自分はどれくらいの間突っ立っていたのだろう。

「何よ。」

それより、顔をバックに入れておきなさいと注意を与える。

「別に誰も見てねえからいいんだよ。それより見つけたぞ！あれだあれ。」

あれと呼ばれたものを見るとそこにあっただのはUFOキャッチャー

であった。

「んん？」

さらによく見ると。中には黒猫の人形が入っていた。

「あんだ、まさか。」

「おう、あれならピッタリだぜ。」

よかった、よかったと一人納得するクロだがティアナは納得できなかった。

なんでか納得できなかった。ゲーセンにある黒猫のぬいぐるみがデフォルトだと認めてはいけない気がした。

「よーし！ティアナ行けー！」

威勢よくクロは他力本願に走る。

「わ、私！？私がやるの？」

焦るティアナ。ゲーセンなんて久しぶりなうえに、UFOキャッチャーだって何年ぶりなのか。まったく自信がなかった。

「お前以外いないだろ？それとも何か？将来有望な機動六課のフォワード陣の一人がこんなところで立ち止まるのか？」

少し、『将来有望』というところに違和感を感じたが、しかしそれでもムツとした。

「いいわよ！…やってやるっじゃない！」

「よし、がんばれ！」

綾波

綾波

タレテルパング

キングオブねずみ

綾波

「がっかりだな。」

「うるさいわね！…しょうがないじゃない、もう勘は鈍ってるのよ！
キャチャラーと呼ばれた私はもう存在しないのよ！」

「お前のごとがだんだん気になってきたよ。」

キャチャラーと呼ばれた過去を問いただしてみたいがそつもいかな

い。

それに最初こそ元気に怒鳴り返していたがだんだん苛立ちを通りこして、へこんでいくティアナを見て何も思わないわけではなかった。

「ティアナ。」

「何よ。」

「少しあれで遊ぼう。」

とクロはギターを模したゲームを指差して言う。

「はあ？でも……、」

と渋るようなティアナを見て

「いいから、行くぞ。」

とクロはただただ急かした。

「まったく、しょうがないわね。」

ため息をついてティアナは歩きだした。

「少しだけよ？」

「下手くそ。」

画面に大きく表示されたゲームオーバーの文字にクロは我慢できず突っ込んだ。これでは、気晴らしにならない。

「だ、だってこれ。左手を動かすだけで精一杯なのよ!」

ティアナも本格的にへこんできた。

おかしい、昔はできていた気がしたのだが。

「たくっ!お前左手のそこだけよく見ているよ?」

そついいながらクロはギターの本体部分とティアナのお腹の部分に挟まれるような位置までやってくる。

「きゃっ!?!?」

「ああ?どうしたよ。」

「く、くすぐったいわよバカ!」

何言っただよとクロは何も感じていないようだ。猫なのだから当たり前だが、ティアナにしてみればなんといいかなんというかなのだ。

「ほれ、来るぞ。押さえる。」

「あわっ!?!?」

必死になりながら押さえてるとクロは曲に合わせてタイミングよくストロークする。

そのカッティングは凄まじく、後ろから見たおじさんが「鬼だ、鬼がいる。」と呟くほどだった。

「よし！ティアナ、締めだ！」

「分かったわ！」

ギューーン！！

パチパチと大きな拍手が生まれた。気付いたらたくさんのギャラリ
ーに囲まれていたのだ。

ブラボーの声に顔を真っ赤にしてうつむくティアナをクロは満足そ
うにしていた。

その後もクロはティアナを様々なゲームに挑戦させ、時にバカにし
たり、時に手を貸したりしながらゲーセンを堪能した。

そんな時間を過ごしながらティアナは思い出した。
なんで昔の自分が上手くゲーセを出来ていたのか。

（兄さん。）

嫌がる自分をホラーゲームに連れていき

カーゲームで自分を三週差つけて泣かせ

そして、最後はいつも笑ってプリクラを撮って

「おい、ティアナ。」

ハッと気付けばクロがバックからティアナの顔を見ていた。

「これからシャッター押そうってのになんて顔だよ。」

まったく、この猫はなんなのだろうか？

初対面で襲われるというトラウマものの思い出を残したかと思えば

こうして

「うるさいわね、あんたも笑いなさいよ。」

「オイラはこれが普通なんだよ。」

気のない声で返してくる黒猫を見ながら。

「く、クロ。」

「ああ？」

「今日は楽しかったわ。あ、ありがとう。」

顔を赤らめてティアナは言う

その瞬間に

パシヤ

「あー！」

このプリクラは人には見せたくないものになった。

喧騒を背中にしてティアナは店から外にでた。
クロは疲れたのかバックの中で寝ている。

「まったく、人をひっぱりまわして・・・、いい気なものね。」

ほんの少し、自分は笑っているのかもしれない。

そう思うと最近自分が考えていたことを今この瞬間だけは忘れることができていたことに気付く。

「ほんと、こうしてればただの猫なのにね。」

まー、たしかにメタリックな身体をしているが

着ぐるみさえ着れば

着ぐるみ

着ぐるみ

ぬいぐるみ？

「あーーーーっ!?!?」

ダッシュで店内に戻り

ダッシュでUFOキャッチャーを見る。

「あーーーーっ!?!?」

すでに黒猫のぬいぐるみはなかった。

どうしよう、どうしようかと辺りを見渡してみる

「あーーーーっ!?!?」

目の前を歩いていく男性が手に黒猫のぬいぐるみを持っているのが見えた。

もう店の外にでてしまおうとしている。

急がなければ!

「待って!待ってください!」

外はすっかり夜だった。

街行く人々の中に紛れようとしていた男性を大声でティアナは引き止めた。

「なんだ?」

年の頃はいくつだろうか?若者にも見えるし、中年の男性にも見える顔立ちにスーツをまとった灰色の髪をした人物だった。

「あの、お願いします!その人形を譲ってください!それが必要な人がいるんです!」

欲しがってるのは人ではないし、自分が非常識なことをしていることとは分かっているがそれでもティアナは頭をさげた。
せめて、今日のお礼くらいはしたい。

「いいぞ。」

「え？」

片手で持っていたぬいぐるみをティアナに投げてよこした男性は、
「じゃあといいながらまた歩きだした。」

ティアナは突然のことに驚きながら「ありがとうございます！」と
頭をさげた。

バックの中で眠る猫に少しはいい報せができそうだった。

クロといっしょ『ゲーセンの書』(後書き)

全然ねむくねーし!!

クロといっしょ『弟子の書』(前書き)

鈴木先生とは大違い

クロといっしょ 『弟子の書』

空気に馴染むということはそれなりに難しい。

例えば、新学期始まってそうとうたってから部活に入ったって全然周りには馴染めないだろうし、まず初めてみるものに対しての目と
いうものは言葉を悪くすれば差別的だ。

それが、人であつても猫であつても

「全つ然落ち着かねえ！」

クロは機動六課隊舎内を歩きまわりながら吐き捨てた。

自分は猫だ、猫はなかなかこんな整備された廊下を歩くななんて経験はしない。足に直接的な感覚はないにせよ、妙に感じる居心地の悪さ。

そして、今度は自らの待遇について考える。

一応のこと、魔道士殺害事件の犯人は別にいるという事実が発覚したのだが、それはあくまでもクロ自身の証言により生まれたも一つの可能性としての話だ。根拠もなければ証拠もない猫の戯言。

そういった理由から、いまだクロは大した自由は与えられていない。

外に出るときは見張りがいるし、こうして歩いている時でさえ視線を感じる。

そして一番の問題は・・・

「縁側と畳み部屋がねえ。」

猫にとっての死活問題。せっかく晴れていても、よく日が当たる場所がなければ意味がない。

いつそ、外にでて適当な場所を見つけて横になるつかと思うが知らない場所で隙をさらして眠るのは気が引ける。
野良だった頃の名残か、少し前に気絶させられるまで一睡もしていなかった。

そしてそうになると、普段なかなか気にならないことが気になってくる。

ジロジロ

イライラ

ジロジロ

イライラ

これだ、さっきから感じる視線。

隊長格に喧嘩を売り、新人達に暴行を働いた殺人事件の容疑のかかったサイボーグの猫という肩書きは自分でもヒクくらいだが、ここまであからさまにビビったように見つめられるといい気はしない。
最初は我慢していたが、段々腹が立ってきた。

ジロジロ

イライラ

ジロジロ

イライラ

「だーっ！うざってー！！」

我慢の限界だった。

「誰だー！？今日まで我慢してやったがもう勘弁なんねえ！！出てこい目ん玉くりぬいてやる！！」

すると、後ろの丁度曲がり角の見えない部分がゴソツと動いた気がした。

「ほ、ほら！バレちゃったよう。どうするの？」

「大丈夫、慌てたら負けだよ！」

ひそひそ声が聞こえるが、ちゃんと聞こえるひそひそ話も珍しい。いや、これは自分がサイボーグ化していることもあるのか。

「おい、お前らはもう負けている。大人しく出てこい。」

「ひゃあ、どうしよう。バレちゃってるよ。」

「く・・・、でもあんなに怒ってたんだし、バレちゃったなら逃げようー！」

ここで逃げられたらまた明日も同じようなことをするかもしれないので、クロは逃がすつもりはなかった。

「大丈夫だぞー？怒らないから出ておいでー。」

「怒らないって？」

「本当かな？」

最初はいぶかしんでいたがやがて決心がついたらしく二つの影が前
に出てきた。

「てめーら！よくもイケシャシャアとオイラの前に出てこれたなそ
こになおれえ！！」

「ひ、ひゃあ！」

「怒らないって言ったのに……。」

二人組の子供をその場に正座させ腕組みをする。

「なんのようだ？エリオにキヤロ。」

「さつきから感じていた視線はお前等か？」

コクリと二人は頷く

「誰かに命令されたのか？」

フルフルと二人は首を横にふった。

どうやらあの、どういうわけかこの二人の保護者をやってるフェイ
トも、上司であるはやても関係ないらしい。

「お前等の意思か？」

するとエリオが口を開いた

「僕の意味です。キャロは心配してついでに来ていただけです。」

なるほど、エリオの方ならなんとなく分かる。つまりそれは、男子ならではの行動力。

いやただ単純に無鉄砲なだけなのか。

悪者退治ごっこでもしたくなかったのだろう。

「へえ？じゃあこうしてオイラの前に来たってことはそういう事か？」

「はい。」

先の戦いでエリオはクロに一撃の下にのされている。さぞや悔しかっただろうに、リベンジマッチというなら二度も三度も受け付ける。こうでなくてはならない。

「よっしゃあーこいー！」

「僕を弟子にしてくださいー！」

エリオは土下座した。

「私からもお願いしますー！！エリオ君を弟子にしてあげてくださいー！！！」

キャロも土下座をした。

「はあ？」

クロは混乱している。

「どづいづことだ？」

「僕を弟子にしてください！」

「いや、だからな。」

「弟子にしてください！」

「その作戦か？」

「弟子にしてくれるまでここから動きません！」

「あ、そう。」

クロはダツシュでその場から走り去る。

そういう事は人の家の玄関の前で言うことだ。

少し、二人をからかいたくなった。

すると後ろから声が近づいてくる。

「待ってください！どうして行っちゃうんですか！？」

「ひびいびすー！ー！」

「なんだよ、動かねえんじやなかったのかあ？」

クロはニヤニヤ笑いながら走る。

二人はどうあっても追いつがる気まんまんらしく、必死な顔をしている。

それを見たクロは楽しくなってしまう。またもやスピードを上げる。

「ギャハハハ！！追いついてみるよガキ共！！！」

と、クロが調子に乗って走っていたところに凄まじい勢いでピンクの光が飛び込んできた。

ズドン

「こら！廊下を走っちゃダメだよ？クロちゃん。」

限界ぎりぎりまで威力を押さえたらしい魔力の光は見事にクロの足を止めることに成功した。

「や、やった！」

「ありがとうございます、なのは隊長！」

二人に頭を下げられたのは「え？何？」と首を傾げていたが二人はすぐに「うーん。」とうなるクロを抱き上げ走り去った。

「あ！こら、二人もだよ！？・・・行っちゃった。」

あの二人はクロを連れていってどうするつもりだろう？

そう思うと気になってしまっ。

「ちょっと見てごよう。」

「小娘が、いつか殺す。」

そんな物騒な目標をたてるクロだったが時すでに遅し、気付いたら特訓に使用している森を抜けたとこのだだっ広い訓練場に来ていた。

「あの、目が覚めましたか？」

自分を心配そうに覗きこんでくる小さな竜と少女の顔。

「お前、オイラが怖くないのか？」

あれだけ自分達に危害を加えた上にさらには人を殺したかもしれない奴を相手に対してこんな顔をするなんて馬鹿なのだろうか。

「えつと正直言つとまだ怖いです。」

でも、と続ける。

「やっぱり目の前でケガとかしてる人を見ると心配しちゃうんです。」

おかしいですか？と自分に困ったような顔を向けている少女を見ながらクロは笑っ。

「いやそうでもねえさ、礼を言っぜ。」

たまにこういう奴がいるのだから困ったものである、人間って奴は。

（ああ、人間じゃなくてもいたっけか？人の喧嘩に首突っ込んだり、人のやるかとなすこといちいち気にかけたり……。）

産みの親は死んだが、育ての親というのが存在するならアイツの事を言うのだろうか。

「起きましたか？」

首を傾けるとそこには少年が立っていた。

真剣な顔で、自分を見てくる彼を見るとなんだかため息がでてくる。

「よお、なんだってオイラの弟子なんかになりてえんだ？」

「……、あなたは僕ら新人達と戦っている時は手加減をしていました。」

あれは間違いなかった。次々と人質をとっていたがあれは下手に攻撃を受けて争いに発展するのを防いでいたのではないだろうか？

蹴りを受けた場所もオデコに身体が倒れるほどの威力でそんなに傷を残さないようにしていたのではないか？

クロはキャロのひざの上で腕を組み黙って聴いていた。

「そして、あなたが隊長達と戦うときにはあなたを僕に、戦いが始まったらダッシュしろ。と言って安全な場所に蹴り飛ばしてくれました。」

エリオとしてはクロに敬意を抱いているのだから問題ないのかも
れないが、言葉をよく聞けばばぞんざいな扱いを受けていた。
しかし、クロという猫は大体の人も物もぞんざいに扱う。

「僕、思ったんです。あなたは僕の知らない強さをもっているって。
ここにいて誰も持っていない強さを。」

その強さがあれば、もしかしたら自分の大切なあの人を助ける力が
つくかもしれない。

すぐにはできなくても

いつか必ず

「強さねえ。」

そんな風に入っているエリオを見ながらクロは強さや力につい
て考えようとしたがヤメタ。

自分の美学はそこにはないのだから考えるだけ無駄だろう。

そして、こんな真剣な奴を弟子にしたらめんどくさいことになって
しまっかもしれない。

いや、だが待てよ。

「よーし！いいだろう。お前を弟子にしてやる。」

自分から弟子をとるようなことはしないが、コイツは一応六課の人
間。

うまくいけば自分の役に立つかもしれない。

それに

「本当ですか！ありがとうございます！」

「ああ、だがオイラは直接お前に何かを教えることはないぜ。お前がオイラから技を盗むんだ。」

「はい！よろしくお願いします！」

「良かったね、エリオくん！」

「フルルウ！」

キヤロと小さい童がエリオを祝福するように駆け寄る。

「ふんっ。」

「じゃあ、唐揚げあげますね！」

僕はお握りを

飯の借りがこれくらいで返せるなら安いものだった。
そんな彼らの様子を遠くで見ている影があった。

「自分の知らない強さ。」

まだ、自分はまだ彼らに教えられないことがあるのだろうか。

「私じゃ、それを知ってもらえないのかな。」

一人思い悩んでいる少女がいる。

自分じゃできないのか。

向こうが分かってくれないのか。

日が暮れて、影は段々と濃くなっていく。

「クロちゃんなら、分かるのかな？」

クロといっしょ『弟子の書』(後書き)

今日の投稿は疲れのたまらないスムーズな投稿でした。

猫なりに(前書き)

昨日は日韓戦でテンション上がったちゃって！
書くの忘れちゃってました！！

始まりますよ！！

猫なりに

クロは思う。

世の中には不思議な話がたくさんある。

この世界にはいるのかは分からないが宇宙人だって存在するかもしれないし、いては困るが幽霊だって存在するかもしれない。

だが、なかなかそんな話は胡散臭くて信用できない、そんな者達だ
って多いだろう。

そう『胡散臭いもの』というのは厄介だ。

本当にあるのか、ないのかはつきりしないままに広がり続けた噂話。

友達の友達というようなもの。

今の自分にとっては目の前のこれだろう。

「なんだ、これは？」

いや、分かる。分かるのだが何故これが散歩からの帰り道、六課に
向かう道の途中に置いてあるのか？

「猫よけだよな。」

ペットボトルにパンパンに入れられた水が太陽の光を浴びてキラキ
ラと輝いている。

だから

「だから、なんだってんだよ。」

これは嫌がらせなのか。
嫌がらせなのだろう。

しかし、これはどんな意味があるのだろうか？
今のところ、コレを見ていても身体に変調はない。
そもそも、向こうの世界でもコレの存在意義は謎だった。

「誰だ、こんなネタにもならない奇行を働くのは？」

「おーほっほほです！」

典型的な高笑いが聞こえてきたが、もういいような気がした。
クロはペットボトルをまたいで先に進もうとする。

「えっ？平気なんですか！？ちょ、ちょっと待ってください！」

どこからともヒュンツと飛んできた小さな影がクロの前で通せんぼしている。

「・・・なんだよ。」

銀髪で羽が生えた小さな少女リインが目の前にいた。

「なんだよじゃないですよ！人がせっかく用意した罠になんの反応もしないなんて！」

この量を運ぶのにどれほど苦労したと思ってるですかと頬を膨らませながら訴えるリインを見ながらクロはこれは一体なんなのかを考える。

(前から思っていたがコイツは妖精か?)

竜もいればしゃべる犬もいる世界である。妖精だっいてもおかしくないだろう。

前いた世界にも相当妙な生き物がたくさんいたが妖精までは見たことがなかった。

少し好奇心がわいてくる。

「なあ、お前はなんの妖精なんだ？」

そう聴かれたリインは「妖精？」と首を傾げるも、次の瞬間には合点がいったようで、更には笑いだした。

「ぷぷぷー！リインは妖精さんではないのですよ！しょうがないです。無知なお猫ちゃんに懇切丁寧に教えてあげる……」

言い切る前にクロはリインの身体を掴み空に向かって全力で投げた。

「さて、帰る帰る。」

隊舎内を歩いているとティアナ、スバル、エリオ、キャロの新人達が向こうから歩いてくるのが見える。

「あ！師匠だ！」

「よお、エリオ。これから特訓か？」

興味があるのかないかクロは新人達を見上げながら問い掛ける。

「師匠って……、あんたらどうなってるのよ。」

ティアナは頭を抱えなくなってきたが、そう言えばあの黒猫襲撃事件の後、やたらエリオがクロを気にしていたことを思い出す。エリオにしても何か思うところもあったのだろう。

（強くなりたい……か。）

自分だってそうだ。と思うもこれからの特訓に妙な考えは持ちたくない。
いらぬ考えを抱いて動きを重くしたくない。

「で、あんたはどうしてたのよ。」

「散歩だよ。」

クロはなんでもないように答えるもエリオは苦笑いしてしまう。

「師匠、勝手な外出は禁止されましたよね？」

「だっけか？忘れちゃってたよ。」

とぼけているのか本当に忘れていたのか、クロは真顔でエリオに返す。

「お師匠さん、私たちの訓練を見てくれませんか？」

それはいいね！とエリオも来てほしいようだがティアナは嫌がっている。なにかにつけて難癖をつけられそうだ。

「おー、気が向いたらな。」

クロモ一応答えておく、それにする事もたいしてないので暇潰しにはちょうどいいかもしれない。

「えーと、なんでみんないきなり仲良さげになってんの？一番最初に会った私が全然馴染めてないのに・・・。」

スバルは納得いかないようでポツリと呟く。

「なんだいたのかお前。」

「ヒドツ!?!」

ギヤーギヤー喚くスバルを引っ張りながら特訓場に向かってあるく新人達を見送りながらどうしたものかと歩きながら考えるも、やはりこれといってする事もなかった。

「しょうがねえ、あいつらのところに行くかねえ。」

Uターンしてティアナ達の後を追おうとしたが

「さ、さっきはよくもやりやがったですね。いい肩してるじゃないですか。」

ラインが荒い息をしながら立ちふさがった。

「大変だったんですからね！あんな遠いところまで投げるなんて。」

あなたが知らないところで奇跡が起きたんですからね！」

涙目で詰め寄る少女にクロは面食らってしまつた。

「OK！ミニマムガール、ちょっと落ち着こうか？」

「誰がミニマムガールですか！私は妖精じゃないしシルバニア家の一員でもありません！！」

いいですか！私はですね！とそこからリインはこんこんと自分の凄さを語りだした。

「ほー、お前は人型のユニゾンデバイスとかいう世にも珍しい掘り出し物で。」

少しハシヨリ過ぎたが大事なところはおさえていたのでウンウンとリインは頷く。

「そのちっこさで、現場管制と空曹長とかいう役職についているぞ。」

ウンウン

「だからどうした？」

ガクツとリインは空中で転けたような動きをとる。

「どづしたってことではないでしょーっ！」

どうしたもこうしたもないだろうと本気でつまらなさそうに見つめてくるクロを見てリインは焦ってきた。

「なんとというか、その・・・リアクションが薄すぎですう。」
涙目になるリインを見てクロはヤレヤレとため息をついて、小さな手をリインの頭にちょこんとのせた。

「よしよし、凄いですねー、リインちゃんは。」

「か、感情がこもってないですー！」

「よしよしー。」

「バカにしないでくださいー！」

「なんだ、もういいのか。」

「あの、もう少しだけいいですか？じゃなくてー！ー！」

ブンブンと腕を振り回してクロの手を振りほどく。

「なんていい肉球してるですか！あやうく騙されるところでしたー！」

仕方ないです。とリインはクロをギッと睨み付ける。

「こうなったら、実力行使ですー！」

ガオーとふざけているのかリインはクロに襲い掛かるつもりするも

「もついい。」

とクロはリインを無視して歩いていこうとする。

「待つです！」

とリインはクロに追いつくように飛んでいき、ビュンビュンとクロの周りを飛び回る。

「ズルいです！ズルいです！あからさまな勝ち逃げです！」

なんの勝負をしたのかとクロは思っていたが、どうにもこのちっこいのをみると調子が狂う。

「関係ないだろ。」

「え？」

クロの唐突な言葉にリインは言葉を失う。

「小さかろうが、普通じゃなかろうが関係ない。お前にはその仕事ができるだけの能力と度胸があるってことだ。」

そんなもんだろ。とクロはリインを見てニヤリと笑った。

「……。」

リインは自分の顔が赤くなってきたのを感じてプルプルと首を振る。

(何を考えてるですか！相手は猫ですよ猫！更に凶暴なサイボーグです怖いのです！初対面の私を泣かしたのです！)

コホンとリインは咳払いをする。

「ヤレヤレ、確かにあなたは、はやてちゃんの言うとおりの存在です。」

気を紛らわせるようにリインはいつかのことを思い出す。

「あなたは人を振り回すのに、あなたを嫌いになるのは難しいです。」

殺人容疑があり、新人達を襲い、隊長達とバトル

ここまでしながら誰も彼を憎んでいない。敵対視するものはあれど強攻策まではとらない。

いい塩梅で彼に対する空気は動いている。

それを聞いたクロは

「へえ、そんなんじゃないつか痛い目みるぜ。」

「？」

リインはクロの横顔を見た。

がクロはなんの表情も浮かべていなかった。

「オイラに関わるとろくなことはない。オイラはな」

疫病神なんだよ。

「それってどういう」

クロに聴く前にけたたましい音でサイレンが鳴った。

「なんだ！？こいつは！！」

クロはリインに向かって大声で聴く。

その初めてみる真剣な眼差しに一瞬気をとられるもすぐに持ち直す。

「事件です！恐らくガジェットができました！！」

猫なりに(後書き)

次はいよいよ撃ちまくりです。

引き金をひくのは(前書き)

2日ペースも悪くない。
クロちゃんが頑張ります。

引き金をひくのは

何が起きた？ どうやら大事なもんを乗せた列車が乗っ取られたらしい。

それはどこだ？ 詳しくは聞き取れなかったが、どっかの山岳地帯らしい。

どこのどいつが とてもじゃないが聞ける雰囲気ではない。

「よーしよし、落ち着こうか？」

クロは焦っていた。

それは知らぬどこかで起きている事件ではなく、今日の前に危機にたいして

「この猫！今までどこに隠れていやがった！」

「貴様、アレだけ私を侮辱しておきながらなんの一言もなしか。」

チビと赤髪に囲まれていた。

この二人はクロに最初の戦闘でコテンパンにのされたわけだが、しかし二人にしてみればあれは汚い不意打ちであり、更には口汚い罵倒の数々も忘れがたく一度でいいから会って決着をつけたかった。が、クロが気絶している間は流石に会いに行くのは控え、もう大丈夫だろうと思ひ探してみれば何故か見当たらない。

二人のストレスは高まる一方であったのだ。

「ここであつたが百年目！」

もう逃がさねえとその眼は語る。

「はっ！なんだよこれからドンパチしようって時に傷物になりてえとは……」

クロもクロで黙っているつもりはなく向こうがその気ならこちらもそのつもりだった。当初はうっとおしいことはゴメンだったので教えて避けていたがもういいことだ。

クロは胸をパカリと開き、右腕を突っ込む

「物好きなもんだ……ぜ？アレ？」

が、盲腸部分にも肺の部分にも何もなかった。

おかしい？自分でここから武器をだすなんて戦闘以外はありえないのに

「あ、クロちゃんの武器ならはやてちゃんが没収したって言ったよ？」

言い忘れていたよとなのはがあっけらかんと事実を明かす。

「なにー！ー！？」

なんてことだ、やりやがったなあ野郎、そんな罵詈雑言が頭をよぎる。

他人の物を盗むなんて泥棒だ。

「うーん、でもやっぱり危ないよ。質量兵器だもん。」

なのはは聞き分けの悪い子供に言い聞かせるようにクロに言うもの

の

「だーから、オマエラはこれからその魔法の力とやらで力づくで敵を黙らせるんだろっが。」

クロはいまだに理解できない。

武器なんて誰が持つても危険なように武器はどんなものだって危険なのだ。

「人間が武器を持つより猫が持っていた方がいいんだよ。」

その言葉を聞いたなのはがムツとしたように口を開きかけるがすぐに自分を取り戻し声をあげる

「今はそれどころじゃないよ、さっきはやてちゃんから連絡がきた。レリックをつんだりニアールが、ガジェットに襲われた。制御を失い、今は暴走状態にあるらしい。」

動ける人は皆動いて！

その声にもその場にいる全員が思い思いの返事をする。

フェイト

シグナム

ヴィータ

なのはら隊長陣は皆出撃する

そして・・・

「皆行くよ。準備はいいよね。」

新人達

ハイ！と全員が腹から声をだす。

臆病になることも、全ての勇み足も押さえ込み、ただ覚悟だけを決めて少年少女達は足を進め、なのはと共に入り口の向こうに消えた。

そんな彼らを見ることもせずお茶をすすめるクロ。

「クロ行ってくるね。お留守番してて。」

フェイトはそんなクロに苦笑いし

「貴様覚えておけ、帰ったら細切れにしてやる。」

シグナムはそんなクロを睨み付けた。

そして二人も入り口をくぐる。

「ふんっ！」

そして、ヴィータはそっぽを向いて入り口の方へ行こうとしていた。

「待てよ。」

怪訝な顔で振り替えるとあいも変わらず猫がお茶をすすっていた。

「なんだよ……。」

またなにかしら嫌味を言いたいのか

「精々死にぞこなえって、あいつらに言っとけ。」

ポカンとしてしまったが

誰に言っしてほしいのか

どうしてなのか

それらが分かってしまったヴィータは思わずにやけ顔になる。

「分かった。伝えておくぜ。」

その顔をチラリと見たクロは手をヒラヒラとさせ、とっとと行けとジエスチャーする。

その態度を見ても今度はヴィータは何も言わなかった。黙って入り口をくぐった。

残されたクロは辺りを見渡す。

椅子にテーブル、そして正面にはモニターが完備されている。まさに作戦会議室と言ったところか。

かつての世界の施設にもこんなものはなかった。かなり科学力が進んでいるのだろうか？

パタパタ

「あの〜?」

そう言えば、奴らはどうやってあの場所まで行くのだろうか?

そこは魔法使いらしくホウキなのか、いやそういえば以前散歩をしていてヘリポートを発見したことがある。

まさかそうなのだろうか? だとしたらガツカリだ。

パタパタ

「あの〜、心配なんですか?」

「ああ?」

と声のした方を見ればリインが浮かんでいた。

クロに睨むように見られても大概は慣れたのか少しはびびらなくなっただけらしい。

「なんだってオイラが、まだ会って少ししかない奴らを心配すんだよ。」

「いえ、だって尻尾が。」

うん、とパタパタと動いているのを確認してしまい舌打ちをする。

そんなクロを見ながらリインは優しげに微笑む。

「大丈夫ですよ。ガジェットは確かに危険ですが、あそこには隊長達がいるんです。それに新人ちゃん達だって素人ではないですし。案外すぐに終わっちゃうかもしれませんよ?」

自分が本当に奴らを心配してるかどうかは別として、クロは勿体ないという気持ちで一杯だと自分で考える。
もし、自分に武器があればあの時に隠れてでもついていったのに・
・、こんなに暴れてもいい大義名分ができるイベントも珍しいのだ。
なんとかして、今からでも遅くないだろう。

(その前に、まずは武器だな。)

そう言えばとリインをジッと見つめる。

「？」と首を傾げる少女は以前はやたと仲良さげに話していた。
確か「マスター」とも・・・、ならばコイツははやての身の回りの
ことにも詳しいのだ。

(「はやてちゃんが没収した」)

クロは動きだした。

まずは手に持つ茶碗を地面に叩きつける。

驚いたリインを右手で掴み、左手で割れた茶碗の欠片をもつ。

「動くな。」

欠片をリインの首筋に当てたなら脅迫犯のできあがり。

「ひっ?!」

ここに来てこの猫のこの行動の意味が分からなかった。

まさか今更脱走を試みようとしているのか？

今までのことは全部嘘だったのだろうか？

少しでも彼のことを知れたと思ったのにこれではバカみたいじゃないか。

「・・・何が目的です？」

冷めたように失望したようにクロに問う。

「オイラの武器はどこにある？」

やはりそれか。思った通りだ。そして、我がマスターが危惧した通りのヤツだったのか。

「あと」

「？」

「その女！」

とクロはシャーリーに向けて怒鳴る。

はひつと完全に気圧された少女に向かい確認する。

「ここに目的地に荷物を送る転送装置みたいなステキアイテムはあるか？」

こくりと頷く少女を見てワオツと嬉しそうな反応を見せるクロ。

そんなクロの真意を流石に悟ったラインは、それでもジト目で睨む。

「そういうことでしたら教えるのはやぶさかではないですが・・・、あそこについてどうするつもりです?」

何を聞いているんだ?とクロはニヤリと笑う。

「暴れてえ、それだけだ。」

集中 集中 集中

少しでも気を緩めたら自分がどこにいるのかさえも頭からトびそう
だ。

戦闘に参加するまでの高揚感も、戦闘に参加してからの刺激的な緊張感も今や消し飛んでいる。

それでも、なんとか理性までは保ちながら敵に攻撃を飛ばす。

「はあああああ!」

それでも分からなくなってくる今までの攻撃で敵の数は減ってはい
るのだろうか、そう言えば自分の周りに味方はいるのだろうか!

「エリオくん!」

ハッと顔を上げればガジェットが目の前に迫っていた。

自分の反応では間に合わないことを悟り、次にくる衝撃に覚悟を決
める。

ガツンっ!!

とそれ以上のスピードで飛び込んできた白い竜フリードにガジエツ

トは弾き飛ばされる。

「大丈夫！？エリオくん！！」

自分のことのように青ざめた顔をしているキャロを見て、ようやく先ほどの危機に対する実感がわく。

それでも、それはボンヤリとしてしまう。

それどころではない、と考えてしまえばもしかしたら『死』ですら無視できるかもしれない。

「厄介ね、これは。アイツが言ってたことが今更ながら難しく感じるわ。」

ティアナは舌打ちをしながら、戦場に向かうへりの中で聴いたあの猫の言葉を思い出す。

『精々死にぞこなえ。』

ここは、ただ逃げるだけでも死んでしまいそうだ。

「それでも私は逃げない！！」

突っ込んできたガジェットを吹っ飛ばす。

約束したんだ。決意したんだ。覚悟したんだ。目指したんだ。

こんなところで自分は

「ティアナ!？」

いつのまにかいたらしいスバルの声に顔を上げた。

「なに、これ？」

さっきまでとは形の違うガジェットに囲まれていた。

「博士、作戦は順調だったはずですよ。ここまでする意味があるのでしょうか？」

どこか遠い場所か

もしかしたらすぐ側なのか

それは起こっていた。

「いやなに、直ぐに仕事が終わってしまっただけでは彼らの給料が下がってしまうのではと思ってね。」

「博士、彼らは公務員なので仕事の量ぐらいでは給料に変化はない

のでは。」

「君のその真面目ゆえに無礼なところ、私は結構好きだよ？」

「そ、そそそうですか！ありがとうございます。」

それにね

「古い友人がくるかもしれないんだ。きちんとおもてなししなくてはね。」

上をみてもいる

右にも、左にも、下にもいる。

囲まれている。

ただでさえも必死でやっていたのにここまでの数ではもう・・・

「無理よ。」

ティアナはポツリと呟く。

どうすればいいのか

これからどうなるのか

わからない。

ただ、それだけで終わった気分だった。

その場にいた全員がうつむいた。

「……」

「!？」

「ヤッハー……!!!」

テンションの高い叫び声が轟いた瞬間

目の前のガジェットが一機ズガガッ!と音を上げながら吹き飛んでいく。

「あれは、銃撃?まさか!」

エリオは攻撃があったと思わしき線路を見下ろす

同時に、ガジェットが数機ほど下降していき、攻撃を仕掛けてきた者の方へ向かう。

「オラア!」

またもや、銃撃にあい今度は一気に弾けとぶ。

少し揺らいだ隙に高くとんだ影はどこからか剣を持ち出しまだ浮いているガジェットに正面から突き立てる。

「まだまだあ!」

今度はその剣を足場にして更に高く飛ぶ。

そして、すたと見事に呆けたようなティアナの肩に乗る。

「師匠!!」

エリオが嬉しそうに叫ぶ。

「ようこそ、クロちゃんのスクラップショーへ。」
「ガンっ！」

クロは自らの座る肩の持ち主をぶん殴った。
最初は混乱していた少女は我に返った途端に顔を怒りに染めた。

「何すんのよ!!」

「よお、生きてたか。」

その時、ハツとした。

この猫が今まで見たことないくらい優しく笑っていたからだ。

しかし、その顔も直ぐに消えるとあの凶悪な笑顔に戻る。

「やれやれ、新人諸君。君たちはこれほど多くの敵を前にしてそんなシヨボイ攻撃じゃギリ貧になるだけだぜ?」

そう、戦いとは

「火力と!!」

パカッとクロの身体中に砲門が現れる。

「根性だ!!」

飛び出していったのはミサイルだろうか
次々とガジェットに当たっては爆発を起こしていく。

「ボケツとしてんじゃねえ!突っ込め!!」

その声を合図に新人達は弾けるように散った。
目標ははつきりした。

今の攻撃で少し統率が乱れているはずだ。

「おい、キャロ!それに乗せろ!!」

「はい!お師匠さん!!」

少し、無謀かもしれない。

だが、もっと無謀なヤツが味方にいるのだ。

「死ねや!!」

撃つ!撃つ!撃つ!撃つ!

当たろうが、外れようが関係ない。

フリードに乗ったキャロに身体を支えられながらクロはガジェット
を次々と鉄屑に変えていく。

「サイツコー!!!!!!」

恍惚な表情で笑うクロを見ながら、もしかしたら危ない趣向の持ち主なのかもしれないなあとかキヤロは考えたが今はそれが気にならないほどこの小さな背中が頼もしい。

パオンっ！

「ん、なんだなんかくるのか？」

クロは線路の向こうを眺める。

「奪われたリニアレールです！あれをここで待ち伏せするって作戦だったんですが。」

この敵の多さというわけか・・・

待てよ

「キヤロ」

「はい？」

「あれを止めればいいんだよな。」

「はい、それが出来れば。ですけど。」

「なるほどな・・・。」

「あの・・・!?!?」

キヤロは気付いた。クロがニタリといやらしい笑みを浮かべたことに。

「レリックって壊れやすいのか？」

ようやく持ちなおした感はある。

あれだけ焦っていた仲間、そして絶望していた友人は今やしっかりと戦えている。

「クロちゃん、ありがとう!!」

自分だつてと拳を固めて振り回す。

砲台を相手が広げていようがどうしようが関係ない！撃たれる前に打つ。

意地でも勝ちたい

勝ちたい

それだけだ！

「はあああ!!」

とスバルが拳を振り上げたとき

ギイイイイ！！

ガガガガガ！！

そんな音が同時に響き渡る

驚いて下を見る

「ぬぐああああ！！」

夢を見てるのだろうか

もうスピードで走るリニアレールを真っ正面から受け止めている猫がいた。

目を血走らせ

全身の毛と言う毛が逆立ち

歯を食い縛ってリニアレールを止めようとしていた。

「ちょっと、クロちゃん！全然作戦ぼくないよそのやり方！！」

止まらないリニアレール

線路にメキメキとめり込む足

しかし、それでも

「うううるうせええ!!」

これがなんだ？

このままいつたら死ぬ？

それがどうした？

覚悟なんかしてない、そもそも自分はやる

「こんな身体あ！オイラのヤル気でなんぼでも動くんずやああああ
!!!!」

ズドン!!と凄まじい音がした瞬間リニアールは止まった。

「すごい。。。」

エリオは呆然としてしまう。

が、その隙を狙ったのがガジェットが一斉に突っ込んでくる。

「んでもってー!!」

しかし、見逃さなかったクロは四両ほど連なったりリニアールを『
投げつけた』。

空中にいた新人達を通り抜けて一斉に攻撃してきたガジェット達に
リニアールはぶつかる。

「チエックメイトだ。」

ガトリングを弾が切れるまで撃ち、振り返りざまに尻尾からミサイルを撃つ。

爆発

「決まったな。」

クロは倒れた。空は青かった。と、そんなクロを覗き込む少女がいた。

「お師匠さん。」

フリードに乗っていたキャロがいつの間にか線路に立っており。肩で息をしているクロに声をかける。

「いいか、キャロ。お前もあれくらいできなきゃなんねえ。いつまでも自信なさげにしてちゃダメだ。」

「ありがとうお師匠さん。でも」

「うん？」

「レリックくびすするの？」

あーーーー!?という絶叫と共にこの事件は一応の解決を見せた。

「博士、あれは。一体？」

その震えた声に影は笑う

「言っただろう、古い友人だと。」

ねえ、キッドくん？

引き金をひくのは(後書き)

大丈夫かこのフセン

サイボーグと私(前書き)

始まるよー。

サイボーグと私

はやては捜し物をしていた。

いつもの場所にあると思っていたのだが、いざそこを捜してみたら見当たらずどうしたことかと考えてみれば、そう言えば年末に大掃除をして置く場所を変えたことを思い出した。

分かりやすいようにと自分で考えてしたことなのだがこうなってしまう以上かつての自分のセンスを疑わざるを得ない。

「入るよはやてちゃん。・・・どうしたの？」

リンからはやてが呼んでいることを聞いたなのはがはやての自室に入ったところははやては自分の机の引き出しを引っ張りだし、頭を突っ込む勢いで中を覗いている。

「ああ、なのはちゃん。ちょっと借りたいものがあるねん。」

「何？」

「縄と釘とロウソクなんやけど。」

「持っていないよ！」

聴いただけでもピンポイントで危なっかしいものをなんで自分が持っていると思ったのかとじつくりと聴いてみたくなった。

「ひよっとして、クロちゃん？」

ピクンっとはやての身体が震えた。

「まだ、許してないんだ。」

ワナワナとはやての拳が震えた。

「あつたりまえやー！あんなことしでかしといて本人反省なしやで？身体に教え込まんとあかんねん！なあ？」

「動物虐待だ。」

ボソツと聞こえた声の方を見たのはは驚いた。

「クロちゃん！傷んだ？」

「イントネーションから想像して答えるが傷んでるぞ？」

部屋の隅にボロボロになった黒猫がすまきにされていた。

「少しは反省しい！事後処理どんだけしんどかったと思うか？『大変』やないんや！『辛』かったんや！」

あの時自分は少し遠出をしていたため、指令を直接とることはできず、現状をすることはできなかった。

しかし、優秀な部下には恵まれていたのでこれといって心配はしていなかった。

が、事件直後の現場を見て愕然とした。

線路はえぐれ

リニアレールは木っ端微塵

「もう、テロヤン。テロリストとテロリストがタッグ組んでるヤン。」

「見事なもんだよな。」

少し誇らしげにするクロをギリリと睨む。

たまたま目撃していた登山客が「猫が！猫があー！」とうなされて入院したという証言もある。

「そして一番の問題はレリックヤ！」

「なんだ？砕けたのか？」

「凄いな新シリーズかな？砕けた欠片を集める旅にどうか。」

破壊魔二人がそこにいた。

「お願いだからそのシリーズは打ち切りにして。それにレリックのことは大丈夫や。奇跡的に見つかった。」

何で見つかったのかが不思議でならないと頭を抱えるはやて。

だが、見つかっただけでは解決しないのが仕事である。

何故、探さなければならぬような事態が起きたのか。

原因、経緯、課題の解決方法を報告しなければならない。

「主犯はアンタや。」

「違つぜ、ガジェットだ。」

「アンタのせいや。」

「違つぜ、ガジェットだ。」

「アンタをなんとかすればどうにかなんねん！」

「違つにゃん、ガジェットのせいじゃん！」

むきーとクロに飛び掛かるつするはやてをなのはは羽交い締めにする。

「はやてちゃん！落ち着いて！」

「頼む！やらせてなのはちゃん！こいつやねんて！今まで色んな間違い犯したけどこれは間違いないねん！」

もう飽きてしまったのか欠伸をしながらはやてを見ているクロは

「それ以上悩むと老いるぞ？」

とはやてを更に挑発する。

「クロちゃん、いい加減に少しは謝ってよ！」

「たくよー、揉み消せよ！皆やってんだろつが。お役所ならそれくらいしてみるよ。」

「火がデカ過ぎるわー！完全に消せるかー！！」

ただでさえも自分たちはこの猫を匿っていると言える立場にある。管理局員を殺害した犯人は未だに不明。もしかしたら、単純にクロが犯人かもしれない。

一応拘束という形で六課にいるが、限りなく自由な形で預かっている。

しかも戦闘行為まで行ったとなれば、ただでさえも危うい立場の六課は瞬く間に食い破られる。

「しかしまあ、今回に関してはお前等はオイラに礼の一つはあってもいいんじゃないのかあ？」

ニヤリとクロははやてに目を向ける。

確かに、というのが傍から見ていたなのはの感想だ。

敵に気をとられ、状況判断を誤り新人達を危うく失うところだったのだ。

そこに駆け付けたクロに全てを救われた。

新人達の命も

レリックも

結果として無事だった。

これはきつと

「救世主ってことかなクロちゃんは？」

「救世主う？こんなんそんな大層なもんやない」

「オイラはそんなんじゃないねえ!!」

血を吐くような絶叫は、目の前の猫から聞こえたのだろうか？

しかしこれは

「二度とオイラをそう呼ぶな！分かったか!？」

怒鳴り声と言うには悲しすぎた。

悲嘆と言うには怒りが大きかった。

「クロ・・・ちゃん？」

ふんっ、とどうやったのか自らすまきを切り裂き、足早にクロははやての部屋から出ていった。

「なんやねん、あれ？」

自分たちがあの猫についてそれほど知らないことを二人は初めて気付いた。

(何てっ たって救世主だからな。)

なんでこつも昔を思い出すのか

(お前のせいだ！お前が来てから・・・！)

知らないとこに来たせいか
(この借りはいずれ)

前はそれほどなかったはずだ。

「ケツ。」

屋上でねっころがりながらクロは思っつ。
つまらないことを考えるな。

それはくだらない。

変わっても、変われなくても消し去ることはできない。

許されない。

「疫病神、か。」

「何それ？」

自分を覗き込む顔がなのはだと気づきクロはそっぽを向いた。

「疫病神ってどういう意味？」

「さあてね、オイラのことじゃねーの？今まさに十分味わってるだ
ろ？」

なのははクロが茶化しているのだと思っつた。

でも、あの時クロが見せたアレはなんだったのだろう。

ただそれだけが気になった。

「それ、黒猫が不幸を運ぶって話？迷信だよ。」

横になるクロの隣に座りながら答える。

迷信なんかじゃねえんだよオイラの場合。

口は開かなかつた。

大体分かっていた。

運ばれる不幸に打ち勝つ奴と飲み込まれる奴。

その二つが存在し、そこまではどうすることもできないこと。

消えるものは一瞬で消える。

自分でも気付かないほど、でも忘れることはできなかった。

言い訳はしない、憎まれ役は自分の仕事なのだ。

「えい！」

と、急になのはがクロを抱き締めて横になった。

「何しやがる！離せコラ！！」

「ありがとう。」

ピタリとクロの動きは止まった。

「ホントに、ありがとう。」

そのまま、一人と一匹は動かなくなった。

が

「ふん！」

とクロはスルリとなのはの腕からぐり抜けスタスタと歩いていった。

「悪いな、オイラそーいうの大嫌い。」

その背中を見ながら思わずなのはは笑ってしまった。
らしくないことを一瞬だけ考えた。

縁もゆかりない、恩もない人間の隣にいた時のあの感じはなんだっただのだろう。

そもそも、ああいう人間は好きじゃない。

優しさが全てだと思っているような、正しさが総てだと思っているような。

「なんだってんだか・・・なあ？」

「さあ、よう知らんけど報告書手伝ってもらおうぞ？」

「オイラ、チヨキできねんだけど。」

「大丈夫、意地でやっってもらおうから。」

根性やる？とイタズラっぽく笑うはやてを見ながらどつやっ
て逃げ
るかを考えるクロ。

サイボーグと少女の交流は始まったばかりだった。

サイボーグと私（後書き）

次回は 彼女を

ちよつとエグく描きます。

特訓（前書き）

今まで一番時間かかったけど、なんのこっちゃありません飲みで時間
がありませんでした。

特訓

「はい！今日の訓練はここまで！」

肺から二酸化炭素を絞りだし、酸素を吸収する。

そんな荒い呼吸音が一瞬の静けさに溶けていく。

空は青く、うらめしいほどだが、雨になったからといって訓練は中止にはならない。

そもそも、中止になんてしてほしくはない。

しかし、自分は訓練が好きではなかった。

面倒だとか、キツイとかいった論外な理由ではなく、もっと切実な

「なのは隊長。」

「なに？ティアナ。」

ティアナは常日頃から考えていたことを伝える腹が決まった。

「この訓練には意味があるのですか？」

なのはの顔が戸惑ったような、怪訝に感じたような顔に少し歪んだ。

それを読み取ったティアナは言い方を変えることにした。

「私はこの訓練を続けることで成長できているのですか？これから先、立派に働いていくための力がついていくのでしょうか？」

合点がいった。そんな顔をしたなのはが答える。

「今はまだ結果にでなくても、いずれ成果は表れるよ。すぐに効果ができる訓練なんか聴いたことないよ。」

しかし、と食い下がることをティアナは押さえてしまった。

だってそうだ、何を言っても仕方がない。

正論は向こうにある。

「大丈夫、この訓練の内容はあなた達一人一人にあった強化を施していくために作られたスケジュールなんだよ？あせつちやだめだよ。」

まただ

「・・・はい、わかりました。」

また、優しく黙らされた。

日々のメンテナンスを怠ってしまうとロクな事はない。

いつどこで、ロクでもない奴にロクでもない事に付き合わされるかわからないのだ。

自分の場合は特にそうなのだからと倉庫からパクった整備用のオイルと器具等で身体を調節する。

因みに自分の燃料の確保は近くにあったへりの燃料から拝借することにした。

更に自分には太陽光電池が備わっていたらしく日の当たる場所で横になるだけである程度、身体が動くほどのエネルギーがたまるようだ。

「ごんごん猫から遠のくなオイラ。」

そうはいうものの確か自分は改造される以前から道具を使ったり二本足で歩いていた気がする。

化け猫という単語を振り払い、身体ならし程度に歩き回ることにした。

前回の件で六課は自分に貸しがある。

そんな理由からなのか外出の際は見張り付きという条件は撤去された。

まあ、そんなものではなくても勝手に出歩いていたのだが今までは監視が厳しく街にまでは一人で行けなかった。

丁度いい機会なので今度外に出てみよう。

「ん？ようざファイラ。今日は散歩か？」

コクリと頷くこの犬もまた、犬ならざる犬らしい。

ゲームという召喚獣のような存在。とリインから取って付けたような説明を受けたが、案外それは真実に近いものなのかもしれない。

「どうだ、いい昼寝場所はあったか？」

またもや頷き、あつちだと首を森の方に指す。

案内しようか？と言いたげな雰囲気であったが、大体の場所がわかればク口は充分だった。

「いや、いいぜ。オイラは好きに寝るからよ。じゃ、お休み。」

「お休み。」

・・・あの犬は喋るらしい。最近知ったことで、あいさつをしたら返されたことに驚いたが、そういうえば戦った時も喋っていた気がする。

当初は見張り見張られる関係性でこちらは向こうの出方を注意していたが、意外にも向こうから親しげに接してきた。同じ動物のよしみなのだろうか。

一度昼寝をしている時になんか暖かいなと思っていたらザフィーラに親猫のごとく抱き締められていたことがあった。

魔女の宅急便のあの犬のように。

普段はそういった関わり方はごめんなのだが、何故かザフィーラに關しては気にならなかった。なんとというか、懐かしい気分になる。

「あ、森って言ったって場所が広すぎるから分かりづれーじゃねえか。」

少し、誤算だった。

それでも大した問題じゃない、行けば分かるだろ。と考え直し森の中に入った。

そして、しばらくぶらついたところ

「ほー、こいつあナカナカ。」

少しだけ開けたところにそれはあった。
ポツカリとそこだけ木々が育ちわすれたような空間。
それでいて、草花を殺すような影はなく。
あちらからこちらまではそれなりに走り回れるほどの広さ。
日の光も申し分ない。

「今日はここだな。」

縁側なきこの世界では、ここがクロのユートピアになりそうだ。

サアツと風が吹く。

太陽の光もここにだけは優しい。

場所はどうでもよく、適当に寝転がって目を閉じた。ガスンっと、
クロの身体を衝撃が襲った。

「どわっ!?!」

ゴロゴロと転がっている感覚。

目を開けた。が、真っ暗で何も見えない。

「夜、か。」

現状確認、苛立ちを覚える。

このままじっとしていたところで目が闇に慣れることはない。
それでもほっといたところでこの敵襲が好転することはない。

「誰だコラ! 蜂の巣になりてえのか!?!」

「クロ？」

聞き覚えのある声だった。安堵と同時に呆れを覚える。向こうかこちらにかは分からないが。

「ティアナか？」

「そうだけど、ごめん。あんた真っ黒だから気付かなかったわ。」

ティアナとしては相手がクロということもあり少しからかいの気持ちをごめたが、クロの様子がおかしい。

「うるせえな。お前『どこだ』？」

自分を探している？

どういうことだ？

猫なのだからこれくらいの夜目は効いているはず。

何か異常がない限り。

（まさか！）

ティアナは青ざめてクロの脇に手を入れて抱き上げる。

「なんだよ？」

いきなり抱き上げられ驚いたクロだが、未だに相手の顔を確認できない。

「あんだ！目どうしたのよ！見えないの！？」

まさか、さっきの蹴りが・・・等とブツブツ呟いていたので少しからかってやるうと思った。

が、月明かりが森に差し込んできたとたん。

目の前がクリアになりようやくティアナの顔が見えた。

「・・・ちげえよ。オイラ生まれつき視力が弱えんだよ。」

「そ、そうなの？」

「ああ、だから泣くなバカ。」

クロに指摘され慌てて顔を押しさえたティアナだったが残念ながら両手を急に離されたせいで地面に落下したので確認することはできなかった。

「な、泣いてないわよ、バカ！」

ゲラゲラと足元でクロが笑う。
本当に嫌な猫だと思う。

「あんだ、こんなとこで何してんのよ？」

話題を変えたいのか、少し焦ったようにティアナは声をかける。

「寝てた。」

あっさりとクロはティアナに話を合わせる。空気を読めるのか壊したいのか、まったく読めない。

が、自分は今そんな奴に関わっている場合ではなかった。

「そ、だつたら早く帰りなさい。」

「ああ？」

「邪魔だから。」

事情も分からないまま、更に蹴り飛ばしたくせに邪魔だから帰れとは……、クロは氣にくわなかった。

「まーいいだろ！話さない！クロちゃんがなんとかしてやるうか
！！！」

ん？ん？とクロはティアナの顔に自分のを近付けて詰め寄る。

「うるさいわね！鬱陶しい！！！」

自分に飛び付いてきたクロを振り払おうとするが微妙に爪をたてて服に取り付いているのか中々離れない。

「大丈夫だつて！オイラならなんとかできるって！」

「絶対嫌！」

「まかせろよ！」

「あらゆる前振りがないしになりそうなのよ！」

そこから、いくばくかの時間が流れ、押し問答が続いた。

「特訓？」

「ええ、文字通りの。」

ほら、教えたんだから帰った帰った。とティアナは投げやりに答え、自分の訓練に専念しようとしているのかクロに背を向けた。

故に、後ろで黒猫がニヤリと笑ったことに気付かなかった。

「よし、そういう事ならオイラが相手になってやろう。」

「は？」

ティアナが振り向いた瞬間。

ヒュンッ

自らに向かってくる剣に気が付いた。

「きゃああああー！」

驚きのままに身体を捻り、なんとも無様に地面を転がる。

「ほー、よくかわしたもんだな。」

よし次はと胸をパカリと開きそこを手でまさぐっている。
ティアナはたまらず叫ぶ。

「あんた何やってんのよ!」

「特訓つてのには相手がいるだろう?こんなところでチマチマ技の練習したって大したものには身に付かないぜ?」

それはそうなのだろうが、それとこれとは別問題なのではないか。
しかし、ティアナはそれ以上にその身に近づく危機をひしひしと感じていた。

「え、遠慮しとくわ。」

ニタリとクロは笑う。

「そう言っなよ。楽しもうぜえ!?!」

チュドーン!!

森のどこかで悲鳴が上がった。

ゼー、ハーと荒い息が二つ分

「やるじゃねえか、このボンクラ。」

「待ちなさい、特訓でその罵倒はさすがにどうかと思っわ。」

序盤にクロが追い詰めていく立場だったが、徐々にティアナが持ち直していきお互いに攻撃をぶつけ合い、いなしあった。

「あんだ、よく笑ってられるわね。」

「ああ？」

「負けたくないとか、勝ちたいとか思わないの？」

なんでそんな気持ちで戦えるのか

目指すものはないのか

そもそも

「なんのために強くなったの？」

クロは構えを解かない。

ただ、油断なく、睨み、口を開いた。

「じゃあ、お前はなんのために戦うんだ？」

ティアナは少し考えたそぶりを見せて、口を開こうとした。

が

「やっぱいいや。」

と、クロは剣を腹に収めてティアナに背を向けて歩きだした。突然のことにティアナは反応ができなかった。

「お前じゃこつから先、他の誰にも勝てねえよ。」

その言葉にティアナは激昂する。

「ふざけないでよ!?!いきなり喧嘩吹っかけてきてなんなのよ!?!」

クロはティアナを無視して歩いていく、月明かりを頼りにしながらフラフラと。

「・・・あなたに。」

ふざけるな

「あんななんかに。」

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな

「何が分かるってのよ!?!?」

クロの身体は闇に消えた。

次の日の朝

クロはぼんやりとしていた。

思い出するのは昨日の晩のこと

「あんなんかに何が分かるつてのよ!!!?」

まあ、確かに戦っている途中であんな言われ方されたら自分でもキ
シる。

だが、あの違和感はなんだったのだろう。

あの目も、あの拳も、あの叫びも、アレは自分のためのものじゃな
かった。

もっと別の何かに固執して、依存して、ただそれだけで戦っている。

はっきり言ってなんの面白味もない戦い。

「しかし、まあ、オイラには関係ないかな。」

それにしても、今日は一体どうしたことが周りに人間がいない。
自分が寝てる間に事件でも起きたのだろうか。

最近、また身体がなまってきた上に、暴れ足りないせいでストレス
がたまってきた。

なにかこう都合よく暴れられる出来事が起きないだろうか？

「クロちゃん!!!」

と、いきなり横から抱き締められた。

「グウエエエエ!!!」

凄まじい力で締めあげられた。
身体のとっかから、なにかが絞りとられそうになる。

「大変だよ!」

「・・・誰だよお前。」

「スバルだよ!」

「誰だよお前。」

「素で!??つて、そんな場合じゃなくて!!!」

続いた言葉にクロは目を丸くした。

特訓（後書き）

次回、クロちゃんが彼女に説教します。

痛みを持つ者達 上(前書き)

始まる！。

痛みを持つ者達 上

「ケンカ？」

ただのそれだけでここまで人がいなくなるほどの騒ぎになるのか？

「誰がだよ……。」

「ティアナが！」

渋りに渋ったためにクロは今、スバルに抱きかかえられながら移動をしている。

「ティアナがねえ？」

ますます、この騒ぎが馬鹿らしくなってきた。

エリオとキャロなんかのケンカなんてもんだったら、どちらにも周りがフォローをいれてやる必要はあるだろう。それでもクロは行きたくなかっただろうが。

ティアナと言えば、もう大概成長もしてるだろう。 いちいちケン

カごときで騒ぐものじゃないだろう。

「違うよ！そりゃあティアナがケンカしているのが私たちのうちの誰かだったらそうかもしれないけど……。」

相手がマズいと言う。

「じゃあ、聴こうか？いい年こいてやらかしたのはティアナと誰だよ。」

「隊長！」

今何て言った？

「なのは隊長だよ！！！」

これは・・・

「どうしたの？クロちゃん！」

「早く行くぞ！」

スバルの腕を振りほどいたクロは威勢よくスバルに声をかける。

「場所はどこだ！？」

「訓練施設があるんだけどそこのフィールドだよ！」

「よし来た！行くぞ！！！」

背を向けて走りだしたクロの顔をスバルは見ることはなかったが

「大変だなあ！」

それはそれは楽しそうな顔をしていたそうだった。

始まりがなんだったのかティアナは覚えていない。

自分にはおかしいところは何もなく、不調は何もないと思っていた。
でも、言われた。決め付けられた。

「やっぱりダメだよ。訓練に影響がでるようなことは。」

大丈夫です。と言いたかった。

「そういうことは私たちがちゃんと考えているから、焦らないでね?」

違っています。

「もっと私たちが信用してくれてもいいよ?」

違っていますよ、隊長。

「さあ、訓練をさいか」

「ひるさい!!--!--!--!」

血がにじむような絶叫。悔しさと苛立ちと焦燥と悲しみと、なのはは呆然としていた。周囲の人間達もそう、だが一番驚いていたのは当のティアナだったのかもしれない。

「ティアナ・・・ちゃん？」

近くで様子を見ていたキャラコが恐る恐ると言った様子でティアナを見た。

が、ティアナの顔は青ざめながらそれでもなのはを睨んでいた。

「いい加減にしてよ・・・、そりゃあ、あんた達にしてみれば私達の事を考えた素晴らしいトレーニングでしょうけどね！それにすらついていけない奴だっっていんのよ！？」

口が止まらない、思考がまとまらない、気持ちだけが動いていく。

「ただのトレーニングですら自分の身の程が分かってしまう。だったら他でがんばらなきゃいけないでしょ！？努力しなきゃいけないでしょ！？」

「おい、ティアナ？」

ヴィータが焦ったようにティアナを止めようとしたが、足が動かない。

ふと下を見ると、そこには黒猫が一匹いた。

「だから、そんなに焦らなくても」

「エース様はそんなもんでしょう？辛くなったら皆が助けてくれる・・・」

周りも優秀で、自分も優秀でピンチになったら助け合って・・・なんて羨ましいファンタジーなんだろう。

「私は違つんです。皆が優秀で私だけはどうもついていけなくて、それでも背伸びしなくちゃいけなくて……。」

約束があつた

大好きなあの人と

絶対に見返してやると

絶対的な存在を踏みにじつてやると

「私は誰より頑張りたいんです！口だけじゃ嫌なんです!!」

ティアナは涙を流していた。

側にいたエリオも、キャロも、ヴィータも、シグナムも

そしてついさつき着いたばかりのスバルも立ち尽くしていた。

そして……、クロは。

「……やっぱり疲れているんだよティアナは。」

無表情でなのはは告げた。

「今日はこれまででいいよ。帰りなさい。」

優しさすら感じさせる一言でなのはは告げる。

「違つ。違つんです。」と力なく呟くティアナに近付いていく。

ティアナには分かる。

この人は凄い人なんだ

この人を尊敬していて

この人に憧れていて

この人にこれから慰められて

そして自分は納得するのだろう

いつものように黙るのだ

また、黙るのだ。

「待ちな。」

と、声が耳に届いた。

叫んでいる訳でもないのに。

「クロちゃん？」

足を止めたなのはが振り返るとクロがこちらに向かって歩いてくる。

「つまんねえな、ケンカだって聴いて見に来て見りゃ散々怒鳴って泣き寝入りか？」

クロはティアナだけを見ていた。

ティアナはただうつむいていた。

「……うるさいわね。」

力ない眩きをクロは聴いた。
だがこんなものを聴きたいわけじゃなかった。

「隊長にキレてまで押し通したい何かがあるのかと思ってみりゃ、
案外あっさり引き下がるしょ。」

「うるさい。」

クロは進む。

「そんなもんってことだろ？結局。だからお前は面白くねえんだよ
バーカ。」

「黙れ!!」

ティアナの絶叫が訓練場に木霊する。
身体中の酸素が怒りで燃え尽きそうだ。
荒い息をティアナは繰り返す。

「思うにお前はケンカを知らねえんだ。」

意地だの、誇りだの、大義だの、意義だの

そんなものがなんの役に立つのか

反論なんぞはご自由に、ただ少なくとも

「目の前に奴をぶん殴れもしないくせに、そこから先のことを偉そうに語るな。」

突然ガツンッとクロの身体を衝撃が走り、後ろに仰け反る。ゴロゴロと転がり、なんとか踏ん張り動きを止めて前を睨む。

「殴れるわよ。目の前のおしゃべり馬鹿猫くらいなら殴れる!！」

ティアナが歯を食い縛り、拳を握り締めて立っていた。瞳は怒りで燃えている。

「上等!！」

ダンツと音が立つほどの力でクロは両足を踏みしめて立つ。

「お前が勝ったら、こっから先お前の特訓に付き合ってやる!！」

「ちょっとクロちゃん!勝手な真似は!！」

「黙って見ている。」

なのはは戦慄で足がすくんだ。恐怖?震撼?そんなものじゃなかった。

睨まれただけで「諦め」てしまったのだ。何を言っても無駄なのだと、強制的に納得させられてしまった。

クロはティアナに向き直り、ニヤリと笑って告げた。

「来いよザコ。」

ティアナは自分がなんと叫びながら突っ込んで行ったのか覚えていない。

魔力を込めた両手でクロに殴りかかった。

どうしても、目の前の相手はぶん殴りたかった。

「振りが甘いつー!！」

しかし、どうしても身長差がありティアナは的を絞れず空振りを繰り返す。

「オラア!！」

懐に一瞬で潜りこんだクロは逆にアッパーカットを浴びせティアナを仰け反らせる。

しかし

「舐めるなあ!！」

ティアナは腹に全力をこめ体勢を整えると同時にその勢いでクロに頭突きを浴びせる。

「ぐうっ!？」

地べたに叩きつけられたクロに追撃で足が振り下ろされた。

ゴロゴロと転がり攻撃を避けると同時にティアナの足を払う。

ベシヤツとティアナは顔面から転けた。

「あんだねえ！」

「ギャーハツハツハ！ざまあ見る！」

クロは楽しげに笑っていたがティアナには腹立たしい。

「お前に何が分かるんだ！」

ティアナは笑うクロに飛び掛かって、叫ぶ。

「私には兄がいた！」

ティアナは馬乗りになって、その顔面に向けて拳を振るう。

「自慢だった！大好きだった！将来的には結婚するつもりだった！」

いやそれは難しいんじゃないかというクロの言葉はティアナの拳に打ち消される。

「才能があつて！勇気があつて！優しくて！」

でも死んだ。優秀な兄は管理局に勤めていた。

その任務中の出来事だった。
哀しかった。

「でも！一番辛かったのは周りの奴らの言葉だった！」

敵に背を向けた臆病者だと。

敵を恐れていたと。

あるうことか、敵に命乞いをしながら死んでいったなどと噂までたつた。

「兄さんがそんな事するもんか!！」

クロは殴られていた。左右に頭を振られながら、それでも黙って殴られていた。

「でも、何も変わらない! だったら私が変えてやる! 強くなって、偉くなって!！」

兄を見下した奴らを見下してやる。

権力を踏み躪ってやる。

才能を握り潰してやる。

そのために強く、ただ強く。

「またそれかよ。」

しかし、ティアナの拳は小さなクロの手に受け止められた。

「んなこたあ、どうでもいいんだよ!！」

戸惑いを見せたティアナの頬にクロの拳がぶち当たる。

「くうっ!！」

弾き飛ばされたティアナは、地面に尻餅をついた。そして、ゆっくりと立ち上がるクロを見る。

「兄貴がなんだ？才能がなんだ？それがなんだ。」

そうじゃないだろ

お前が今戦っているのは誰だ？

そいつが今戦っているのは誰だ？

兄貴か？才能を与えた神様か？

くそ食らえ

「お前はオイラをどうしたい？」「お前が勝ったらそれは兄貴のおかげか？」

ティアナは動かない

「お前が負けたらそれは兄貴のせいかな？」

ティアナは動けない。

そんな様子をクロは睨む。ここで動かなければただの馬鹿だ。

「・・・勝ちたい。」

「聞こえねえ。」

クロはニヤリと笑う。

「私は！あんたに！勝ちたい！」

自分のために勝ちたい

自分は絶対にコイツに勝ちたいんだ

コイツはここまで一切武器を使っていない

このままでは悔しすぎる。

「ハアアアアア！」

全力を込めよう

全霊をかけよう

このふざけた猫を

「クロスファイアシュート!!」

この不器用な猫を

(ありがとう、クロ。)

勝負はついていた。

周囲の者達が立ちすくみ、声すらかけられなかった混乱はたった一瞬で終息した。

「はぁー、やっぱりダメね。」

ティアナは仰向けに倒れふしていた。

攻撃をかわされた後の隙は大きく、クロに鳩尾に全力の蹴りを食らった。

最初は声すらでないほど悶絶したが、今は落ち着いた。

心も、身体も

「あんだ、最後まで本気出さなかったわね。」

傍らに立つクロに目をやる。

クロはひょうひょうとした表情でティアナを見下ろした。

「本気じゃねえ奴は、ケンカの土俵にすら上がれねえ。お前にはそれができたじゃねえか。まだまだ、これからだろ?」

クロはぶっきらぼうにティアナに返す。

その言葉が何よりティアナは嬉しく、この戦いが報われた気がした。

「ところで、なのは？」

急にクロは近くにいた少女に声を投げつけた。

「お前？オイラが何もしなかったらどうしてた？」

痛みを持つ者達 上（後書き）

読み安さを重視で上下に分けます。
次回はクロちゃんまじ頑張りです。

痛みを持つ者達 下(前書き)

投稿遅い!

痛みを持つ者達 下

いったいどれほど嫌な思いをすれば、誰かを救えるのだろうか。

いったいどれだけ自分を嫌いになれば、誰かに寄り添えるのだろうか。

彼女が最近まで不満を感じていたことは分かっていた。
思えばそれは最初の段階でそうだったのかもしれない。

周りとは比べられることが不安で、周りとは比べられることが不満で、
そんなことにいつか限界がくることも薄々分かっていた。
だからこそ、彼女には焦ってほしくなかった。
もっとゆっくり、自分を大切に動いてほしい。

それができなかった馬鹿を知っているだけに自分は思った。

しかし彼女は止まらなかった。

夜な夜な特訓を繰り返し返し、そして朝からまた訓練。

間違っている、それなら正そう。

それが当然だと思ったのに、彼女は分かってくれなかった。

彼女の怒鳴り声、彼女の苛立ち。

あなたには分からないでしょと言わんばかりの瞳

「どっするつもりだった。」

もしかしたら自分は

「・・・それは」

最悪な事態を

「それは」

この手で起こそうとしていたのかも知れない。

「ま、いつか。」

「えっ？」

クロはあっけらかんと話題を変えた。
さっきまでの空気を忘れたように、もうなかったことのようにな
はから視線を外す。

「おいザフィーラ、こいつを運ぶの手伝ってくれ！」

声をかけられたザフィーラが駆け寄ってくる。

「あ、あの師匠！手伝います！」

「お師匠さん！私もやります！」

「大丈夫？ティアナ！」

新人達がクロ達に走りよりティアナをザフィーラの背に乗つけた後、
負担を軽くするために身体を全員で支えている。

「こんなにいらねえだろ。」

などと言って見たものの、なんとなくクロも理由は分かる。

気まずいのだろう。あのような事があった後に当事者である上司の
近くにいることは自殺行為だろう。

針のむしろにダイビングだ。

医務室はどこだったか、と会話を交わしながらクロ達は訓練場から
いなくなった。

残ったのは隊長達のみ。

「なのは？」

遠慮がちになのはに声をかけるフェイト。
さつきまで何もできなかったことが恥ずかしかった。

膝から崩れ落ち、なのはは顔を伏せた。
影に隠れた顔からは何も感じ取れない。

今なのはの肩を抱けば彼女は涙を流すのだろうか？
でも結局考えただけで

自分なのはを一人にしてしまったのだとフェイトもシグナムもヴ
イータも今更知ることになった。

医務室に連れていかれたティアナは問答無用でベッドに運ばれた。
改めて顔を見ると酷い有様で、頬は腫れ口に血がにじみ鼻血も出て
いる。

「クロ・・・、あなた。相手はレディよ？」

「それがなんだよ？」

ティアナの傷を治療しながらシャルマルはクロを非難めいた顔で見つ
める。

しかし、口では言い返しつつも顔を仏頂面でそらしている所を見る
とまったく反省していない訳でもないらしい。

「あれだけガンガン殴られてりゃやり返したくもなるぜ。」

「悪かったわよ……。」

他の新人達にはお使いをたのんだ。

エリオとキャラにはお粥を作るように、スバルにはジュースを買ってくるようにと。

スバルは自分だけが本気のパシリ扱いだということを悟りつつも黙って買いにいった。

「……。」

「ふあ。」

ティアナはしばらく黙っていたがクロとしては少し飽きがきた。

あんまりこういう空気は好きではなく先ほどの欠伸もわざとらしいと言われたら実際その通りだ。

「師匠！お粥ができました！」

「できました！」

と、ちょうどよくエリオとキャラが戻ってきた。

やっとこの沈黙が終わるのかとホッとした気持ちになるクロだったがティアナを見るとまだ顔がすぐれない。

「ちっ、スバルの馬鹿はまだ帰って来ねえのか？」

「はい、でも師匠。レモンメローはそう簡単に見つかるジュースじゃないですよ?」

やはりファンタあたりにすればよかったか。

しかしクロは若干スバルで遊んでいることもあり、本人に対しての関わり方を変えるつもりは毛頭ない。

「いいや、ファンタはだめだ。よしティアナー、飯食え。」

キャロがお粥をお椀についでいる様子を横目で見ながらティアナと向き合う。

「・・・食べたくない。」

がティアナはそれどころではなかった。

自分がしてしまった上官への暴言と、六課内での暴行騒ぎ・・・、それだけでも充分処分が下ってもおかしくない。

もしかしたら、自分は後悔をしているのかもしれない。

顔を青ざめているティアナを見ながらため息をつく。後悔するくらいならやらなければよかったのにとクロは思うが、ティアナはそうするしかなかったのだらう。良くも悪くも青かったのだ。

「食え。」

「いいわよ。」

キャロから預かったお椀を持ち、スプーンでお粥をすくってティア

ナの口の前へ運ぶ。

「食えよ」

「やだ」

「食・べ・ろ」

「や・だ」

もうほつといてくれと言わんばかりの様子だった。仕方がない、とクロはお粥を口一杯に頬張り。

「お師匠さん？」

ティアナの胸をまたぎ

「クロちゃん？」

頭を押さえつけ

「師匠？」

「ひょうふあねえな。」

口一杯にお粥を頬張ったクロ。

へ？と大した反応をとることができないティアナはひたすら込められる力に戸惑う。

「ま、まさか！あんだ！」

体をよじろうとするも時すでに遅く、動かない。

「待つて！待つてよ！初めてが猫なんて嫌——！！」

事情を説明しよう。

と考えたなのは他の隊長達と連れ立って医務室へ向かったがもはやそれは死者の行列と言つて差し支えない。

沈んだなのはを慰めるようにフェイトが傍らに立ちながら進む。

ヴィータはこんな空気が大嫌いだ。

できることなら、いつも熱く騒がしくありたい。

それがらしさであり、それがだせないこの状況は苦痛だった。

しかし、あの時自分は何をしだらう？

ティアナに戸惑い、なのはに戸惑い。

結局はこれ。

なのはに寄り添えず、大切な仲間を一人にしてしまった。

こんなにもたくさん仲間がいたのにも関わらず、一人ぼっちに

「きゃああああ！？むぐううう！！」

と医務室から絶叫が聞こえた。

何故かその後口を何かでふさいだような声も漏れた。

「これは・・・ティアナ！？」

まさか、何かあったのか！？と全員で医務室に向かって走る。全力疾走で医務室にたどり着き、なのはがドアがもげるほど強く開く。

「どうしたの！ティ・・・アナ？」

たどり着いた隊長達が見たもの、それは

床に散乱したお粥

目を丸くしたエリオ、キャロ、シヤマル

虚空を見つめ、何故か顔を赤らめたティアナ

そして、壁にめり込んだ黒猫だった。

「クロちゃん・・・。」

壁にめり込んだ猫に語り掛ける。

すると律儀にもくぐもった声がかえってくる。

「なに、したの？」

たぶんコイツがしたのだろう、とこの惨状を見た隊長陣は皆気付いていた。

「いや、口移し。」

本当にいろいろしてくれる猫である。

壁から引つ張りだされた猫を囲んで今は全員で説教している。

女の子にいきなり何をしているんだ

そういうことは本当に大事なことなのだ

意外とエロいのかお前は

もっと時間をかけてやるべきだ

途中「オイラは猫だ。」「お前らの趣味嗜好の問題じゃねえか。」

「そもそもあいつが食わないのが悪い」

と反論が入ったが黙殺された。

クロはおおよそ乙女心なんてものが分かるような猫ではないし、猫にとって口移しは結構当然の行為の一つである。

色々言われてもいまいちピンと来なかったが、しかしまったくの無知ではなく意味はわかっていた。しかしそれでも納得はいかない。そもそもなんだこいつの反応は。猫に舐められた程度のことだろうに、大げさすぎる。

が今更何を言っても乙女の怒りがおさまるはずもなく。

そこから30分ほどクロは説教をつけた。

「で、何しに来たんだ？」

「その一言で話題変えちゃうんだ。」

主人公って便利だね、とフェイトが呟く。

しかし世界観の崩壊を招きかねない言葉だったため地の文に差し替えられ。

クロの耳には入らなかった。

「事情を説明しにきたんだよ。」

なのはは前を見つめていた。

事情ねえ。

少しまだめんどくさい話は続きそうだ。

痛みを持つ者達 下(後書き)

次はまたのんびり暴れます。

悩みながら（前書き）

奇跡を起こしてでも続けるぜ！

すみませんでした！

悩みながら

「事情……ですか。」

なのはの言葉を自分の頭で考えてみる。

それは、自分の特訓への苦言についての説明をするということなのか？

いかんせん、ティアナにはよく分からないことだった。

「別にいいです。」

だから、断った。

正直あの時、一番悪かったのは誰か。

それは自分だ。

自分の要求を無理に通そうとできなくなったら逆ギレ……、しかも相手は自分にとっての上司だ。

ベッドの上、毛布を握り締めながら考える。

「悪いのは私なんです。」

「違うよー!!」

だからなのだろうか、なのはの怒鳴り声の意味がよく分からない。

「そうじゃない!そうじゃないんだよ!」

なのはは分かってもらいたかった。

ティアナの危険な状態を、自分が何をしようとしていたのかを、で

もそれを彼女は拒む。

なぜ？

話を聞いてもらえれば分かってくれるはずなのに

それすらも拒むのは何故か、何故か、何故か。

「おい」

とクロの言葉が静かに、しかし強くなのはの鼓膜を叩く。

「テンパリ過ぎだろうが、お前ら。」

強い視線を向けられて、それでもしゃべっていられるほどなのはは強くなかった。

そう、彼女は強い人間じゃない

あの時、ティアナに罵詈雑言をぶつけられた時に我にかえって驚いた。

そしてなりより

かえってきた「我」に心から安堵した。

信じられない感情が芽生えていたから。

繰り広げられる悲観的なセリフの応酬……クロは正直『飽き』
がきた。

最初はそこそこ真面目に話を聴いていたが、どうにも要領を得ない
話ばかりだ。

ようはとつとなのはかティアナがどつちかが謝ればいいのだ。そ
してその後はとつと二人でどうにかすればいい

なのはも事情がどうのこうのとめんどくさい方向に話を持ってくか
らよくない

だからこう人間様の高尚なお話というものは

「ただいま！クロちゃんレモンイエローじゃなくてイエローメロー
だったよ！それに中々見つからないから少し遠いとこまで行ってて
さ……ん？」

どうしたの？」「

スバルが騒がしく帰還した。

手には六本ほどの缶が入った袋、しかも中がごちゃついているところを見ると走っただらしい。

炭酸だということは考えなかったのだろう。

バカだから。

「おせーよ。」

「なんでだろう、四ヶ月くらい時間がかかったような気がしますね、師匠。」

呆れたクロにエリオが同調するが仕方がなかったんですよ、ほら大
学とかあるじゃないですか？テストもあるし単位も必要だし、ケー
タイ料金も払わなきゃいけないし、後はまあ、すみませんでした。

「文字数の無駄ですよ。」

キャロの超宇宙のつぶやきは沈黙の中に消えた。

「えええと、そ、そうだ！」

間違いなく自分はシリアスシーンを台無しにしたらしいとスバルは直感し、自らの建て直しを図る。

「そついえばさー、さっき街の銀行で人が一杯集まってね。なにかな？って思ってたら銀行強盗だって！このご時世に！私初めて見ちゃってテンション上がったよー。」

・・・

さて、ここですつ説明するとしてよう

彼女は管理局に勤めているヒヨッコ魔法使いであり

管理局は街の防犯や警護、そついった事も勿論仕事だ。

そしてその彼女は銀行強盗を目撃したという

もう一度言おう彼女は管理局に勤めている。

そしてスバルはここにいる。

ゴチンっ！

「ば、バカもの！！何故その場から電話で連絡するなりしなかった！？」

いまだにポカンとしている間抜け娘の脳天にシグナムの拳骨がぶち当たる。

「きゃうんっ！イタタ〜、ってそう言えばそうだ！？」

やれやれと額に手をやるシグナムだったが、ある意味ではスバルに感謝しているのだ。

この慌ただしい少女が先ほどまでの空気をかき乱してくれたおかげで少なくとも自分は落ち着いた。

そつとこの重たい空気の持ち主である二人をそつと見てみるが、まだ立ち直ってはいない様子だったがそれでもノロノロと動きだしている。

「ティアナ・・・、大丈夫なの？」

喋るに喋れなかったフェイトが青ざめた顔でベッドから降りたティ
アナを見つめる。

足はまだふらついている。目を見ても明らかに心身共にベストコン
ディションではないことが分かる。

それでも

「大丈夫です。私はやれます。」

フェイトは彼女を止めることはできなかった。

ヤな空気だぜ。

ヴィータにしてみればここまでの流れはまさに地獄だった。

彼女自身の価値観というものは分かりやすい。

直情的に物事を見て、直感で行動を起こす。

簡単に言えば一気に白黒をつける、というよりは最初から白黒が分
かっている方がいい。

今まではずっとそうだった。

ただ主のために働いていた頃と、主のためだけではなく他にもでき
た大切な者達のための今。

ただそれだけで自分は何も悩む必要はなかった。

しかし、現在自分の目の前で起きてることは白か黒か。

（曇天みたいな空気だ。）

グレーってヤツか。と柄にもなく少しばかりうまいことを考えたもののヴェータには答えは出せなかった。イヤ出したところで、自分はどうするのだろうか？

なのはを支持して傷付いた部下に追い討ちをかけるのか？
ティアナをかばって長年の親友を孤独にするのか？

誰もが苦しむようなそんな答えを誰が望むのか。
分からず、なんとなくあの猫の事が気になってしまった。
そして医務室の周囲を見渡してみても気付く。

「あれ？」

部屋の中には黒猫の影も形もなかった。

「どけっ！どかねーとコイツをぶっ殺すぞ！！」

街の銀行、白昼堂々それは起こっていた。

一人の少女を羽交い締めにし、側頭部に銃を押し付けた黒マスクの男、その周りでは五人の男達が似たような最近ではサバゲーでしかお目にかかれなような格好をして集まった者達を睨み付ける。

「ママーっ！！」

捕まった少女は泣き喚いて母に呼び掛けるが、当の母親は顔面を蒼白にして同様に娘の名前を泣き喚くだけだ。

『要求はなんだ！？我々はできうる限りのことはする！だからはやく人質を離せ！！』

一人の男が立派なスーツを羽織って、スピーカーを片手に叫ぶ。

彼は管理局に勤めている男で、管理局に在籍しながら魔法の使用を許可されていない警備の仕事を行なっている。

普段はそうした事は大した支障にならなかった。

自分達のような人間は事件が起きた際の現場の保存、野次馬への対処、そして後片付け・・・、それさえ出来ればよかったのだ。

魔法を使う凶悪犯には魔法を使える者達が対応する。

それでよかった。それでよかったのに。

「うわー、先輩。あれ銃って奴ですよね？俺映画でしか見たことないですよ。」

一人の若者が囁いてくる。彼は年若く、あのような質量武器を見ること自体が初めてのようで、興味深そうに男達を見ている。

いつもなら、そんな不真面目な若者を叱り飛ばしているのだが今はそんな場合ではない。

自分はあるがどういったもので、どのようなことを引き起こすのかは理解できる。できるのだが。

自分達は丸腰なのだ。

知っているからといってどうすることもできない。

相手はどうやら自分たちが管理局の人間だと理解しているらしい、しかしそれがいい誤解を生んだらしく、相手は自分たちが魔法を使えると勘違いしている。

それがこの膠着状態を作っているらしい。

(クソっ！応援はまだか！？)

何故だ？本部に連絡しても動きが鈍い。

相手は武器を持ち、人質をとられている。

膠着状態はいつまでも続かない。

「ちくしょう！そこをどけ！！どけよ！！！！！」

犯人の一人がこの空気に耐え切れなくなったらしく、銃をこちらに向けながら歩いてきた。

「や、山さん逃げましょうよ！？」

「ふざけるなあ！！！」

部下の若者がその場から走ろうとしたその瞬間、若者はぶん殴られていた。

「武器もねえ！魔法も使えねえ！！そんな俺達があいつらと唯一戦える方法はなあ。」

その迫力に押されたように男は立ち止まる。

「しょんべんたれようが、身体に弾丸うちこまれようが、ここから意地でも動かねえことなんだよ!」

「山さん……。」

泣いている少女

そして母親

後ろにはたくさんの野次馬

まだ誰も救われてはいないのに、自分は逃げてはいけないのだ。

「要求を言え!金が金ならいくらでもくれてやる!借金してでもな!お前らの安全もこの首かけて保証してやる。」

「あんだと?」

犯人達の動きが止まった。

「だがその娘は離せ。なんの関係もないだろう。お前達の足枷にもなりかねんぞ？」

「。。。。。」

迷っている、そんな空気を感ずる。

今か？やるなら今しかないのではないだろうか？

子供だけでも救わなくては、走って子供を奪い返し、撃たれようがどうしようが安全を確保する。

やるなら今しかない！

「危なかった。手遅れにはならなかった。」

黒装束をまとった少女がいつの間にか目の前に立っている。

「その娘を離しなさい。」

少女の凜とした声に我に返った少女を抱えた男が叫ぶ。

「てめえ！誰だよ！」

「管理局の者です。」

当然のように事務的に、しかしその瞳は力強く。

「名前は知る必要はないでしょう。大人しく捕まりなさい。」

少女　フェイトは静かに通告した。

「ありがとうございます。」

唐突な言葉は自分に向けられたものらしい。

「え？」

「あなたのおかげで間に合いました。」

油断なく犯人達を睨みながら小声で囁く少女はフェイトという名前らしい。

しかし、その言葉には素直に頷けなかった。自分は何もできなかった。ただの唐変木の如く、突っ立っていただけだ……。

そんな心の声を察したのかフェイトはさらに言葉を続けた。

「あなたがいてくれたおかげで私達は間に合いました。あなたが時間を稼いで彼らの足止めをしてくれたおかげです。」

少女に言われ、言葉を理解し、理解したうえで惚けてしまった男・山さんだったが、そんな場合ではなかった。

「油断なさらいでください。奴らは人質を」

「人質はこの娘ですか？」

何故かフェイトはさっきまで人質だった少女を抱き上げていた。

「あー、そうそうって……ええー!!?」

一体どうやったのかと、山さんは驚きおののいていたが、周りの人間は知っていた。

一瞬フェイトの身体が霞んで消えたと同時に少女を人質にとつていた男は吹っ飛び、手を離れた瞬間に落ちていく少女を抱きとめたと同時にまたフェイトの身体は霞んで元いた場所に戻った。

超スピード、六課でも圧倒的な速度を誇るフェイトならばこそその芸当だった。

その証拠に彼女のたく少女はスピードに耐え切れず昏倒している。

「可哀相に、気絶するほど怖かったんだね。」

（おめーだよー！！）

とは誰も言えなかった。流れるに。しかし、もう一つの流れは変わった。

「ボ、ボスどうするんですか？」

犯人の一人が泣きそうな声で犯人の中心人物と思われる男に話しかける。

「どっつするもどっつするもあるかよ！？とっと逃げるぞー！！」

「そ、そんなお金は？お金はどうするんですか！私にはお金が必要なんです！」

切羽詰まった声で男は掴み掛かるも、無造作に振り払われる。

「黙れ！俺には無理だ！！無理なんだよ！！！」

そう叫びちらして銃を空に向かって打ちまくる。

「うわーーーー！！！」

野次馬の一人が恐怖に耐え切れず声を上げると、そこら中から混乱の音があがる、ここにきて人手がたりず人払いをしていなかったツケがまわる。

混乱

逃げ惑い、走り回る人々の声にはフェイトの、さらには山さんとその部下の声も届かない。

その混乱に乗じて、犯人達が散りじりに逃げだした。

「ハーハッハッハ！あばよ間抜けな管理局共！！」

犯人達のボスが哄笑はあげて人混みの中に消えていく。

「くそっ！おい追っぞ！！」

「は、はい！山さん！！」

二人の警備が走りだそうとしてもフェイトは動かない。

それどころか完全に警戒をといて近くにいた少女の母親に少女を渡して、必死になって頭を下げる母親に気にしないでいいという素振りをしている。

何のつもりか？まだこの街には質量兵器をもった凶悪犯が存在しているのにそんな悠長なことを。

「フェイトちゃん、捕まえてきたよ。」

・・・と、一人の栗色の髪をした少女がぼろ雑巾を引きずりながら歩いてきた。

「なのは、大丈夫だった。」

「うん、一応ね。」

この場合の大丈夫か？は戦闘においてのなのは身を案じてのことではなく、先刻の件に関してのことだろう。

どんな状態にあらうがなのはがただの犯罪者に遅れをとるはずはない。

ないのだが、それはただ肉体としてのことであって

心はきつとズタボロなのだろう。

それでも彼女はやってきたのだ、それが彼女の役目で仕事で生き甲斐で

分かっているからこそフェイトはなのはには来てほしくはなかった。

「フェイト隊長、あちらに二人いたので連れてきました。」

現われたのはティアナだった。

彼女は両手に二人、ズルズルと引きずりながら現れた。

やっていることは豪快だったが、しかしなのはの姿に気付くとティ

アナは黙りこんで顔をふせてしまい。

なのはの方も同じ反応をみせた。

間に挟まれる形になったフェイトはいたたまれなくなって話題を変
える。

「さて、後は二人だね。一人は逃げたボスト、もう一人は……。」

さつきから黙りこくっていた男がいたことを思い出しそちらに目を
やれば男が一人へたりこんでいた。
先ほどの混乱でも逃げなかったようだ。

「く、」

しかし、身体は少しずつ震えていき更に震えは強くなる。
計画が頓挫したことに對する絶望かとフェイトが訝しんだその時

「くそが——！！！！！！」

突然男が叫びだし、手にもった銃を自らのこめかみに押し付けた。

「！！？」

さすがに、なのはもティアナも我にかえり男を見つめる。

「何をする気ですか！」

「もう死ぬ！死んでやる！！」

目の焦点はあっておらずひたすらに、呪うように男は怒鳴った。

「自分の娘すら救えないなんて・・・！」

それはただの男の叫び

「どづいづことですか？」

馬鹿な自分を呪った男の

男には娘がいた。来年小学校にあがる小さな、かわいい一人娘。自分は魔法の世界に勤めながら、デスクワークに精をだすしがないサラリーマン。

美人とは言えないがそれでもこの世界で唯一「愛している」と言える妻。

貧乏ではないが裕福ではない暮らし。

そんな生活が突然、崩れた。

ある日学校で娘が倒れた。

連絡が来た頃には娘は病院で、自分は働いていた。

何もかもをほっぽりだして病院の一室に駆け込んだが、そこにいたのは泣き疲れて立ち尽くしている妻と、身体中に管を点けている娘だった。

先生の話では、とても長い入院になるらしい。
そして、臓器の移植が必要で、

たいそうな手術費用がかかるらしい

働いた。借金もした。寄付金も募った。
それでも足りない。まだ、全然足りない。

そうこうしているうちに時間は過ぎていく。
焦った。焦れば焦るほど、考えが鈍る。

そしてある時、かつての友人から話ってきた『いい儲け話がある。』と。

「そうですね！そうですね！！自分がどんなに馬鹿なことをしているかは分かっていますよ！？」

男は叫ぶ。この間はフェイトもなのはもティアナも、口を開くことはできなかった。

「でも、私は！娘を救いたい！救いたいんです！！それができないなら・・・、私には生きていく価値はない！」

どんな言葉も彼の絶望に取り込まれてしまっただろう。

「だったらとつとと死んじまえよ。」

と声が響いた。男には驚くほど足下から聞えてきたが、彼女達には慣れた場所から聞える。

「救いたい人がいる？だったら最初から命をかけるよ。ダメだったから死ぬ？できそうもないからやめる？ふざけんなよ。」

どこからともなく現れた黒猫はそっと男の前に立つ

「銀行強盗が失敗したなら！テロリストにでもなつて出直してきやがれ！！出した拳を男が引つ込めんじゃねええ！！」

一喝

ビリビリと空気が震えるのをその場にいた人々が感じた。

まだ冷めやらぬ混乱の中、クロの絶叫だけはよく響いた。

ズガン

そして銃声

拳銃が落ち、血が流れていた。

男が自らの手を見ると、明らかに穴が開いており、そこから血が溢れている。身体中から力が抜けたように男はへたりこんだ。

「しばらく片手は使えねーな。」

黒猫　クロから背を向けながらしゃべる。右手のガトリングから煙が出ていた。

「でもま、自分の娘の頭を撫でてやるくらいは事欠かねーだろ。」

男は涙を流していた。

「クロちゃん……。」

犯人達は護送車に入れられて管理局に連れていかれた。ほとんどの犯人が気絶していたが、たった一人手をふってきた男がいた。

「けっ、疲れるよな。こういふのはよー。」

フェイト、なのは、ティアナは何も言えず立っていた。

「なのは、ティアナ！」

ビクリと二人の身体が震える。

「納得しろなんて、言わねーよ。ただなもっとお互いの考えに付き合っただけでもいいんじゃないか？」

そう言って、クロは歩きだした。

そんなクロの背中はいささか大きく見えた気がした。

「ねえ、フェイトちゃん。ティアナ。」

なのはがゆっくりと言葉を発する。
慎重に言葉を選んで

「私ね、少しでもクロちゃんのこと分かった気がするよ。」

「なのはも？実は私も。」

「私もです。」

三人は納得して笑いだした。

「クロちゃんは、」

「クロちゃんって、」

「クロはきつと」

「「「お人好し!!!」」」

悩みながら（後書き）

次はもっと早くするぜ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3931v/>

疫病神と魔王

2011年12月15日01時50分発行